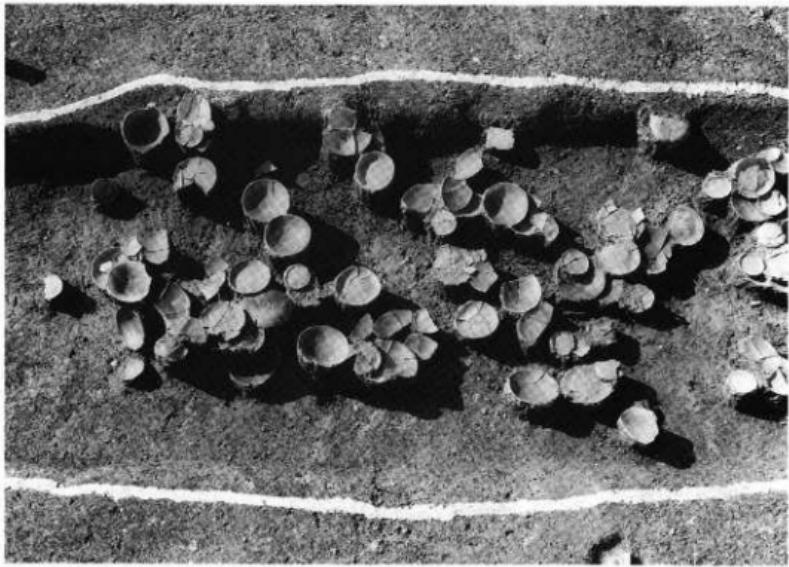




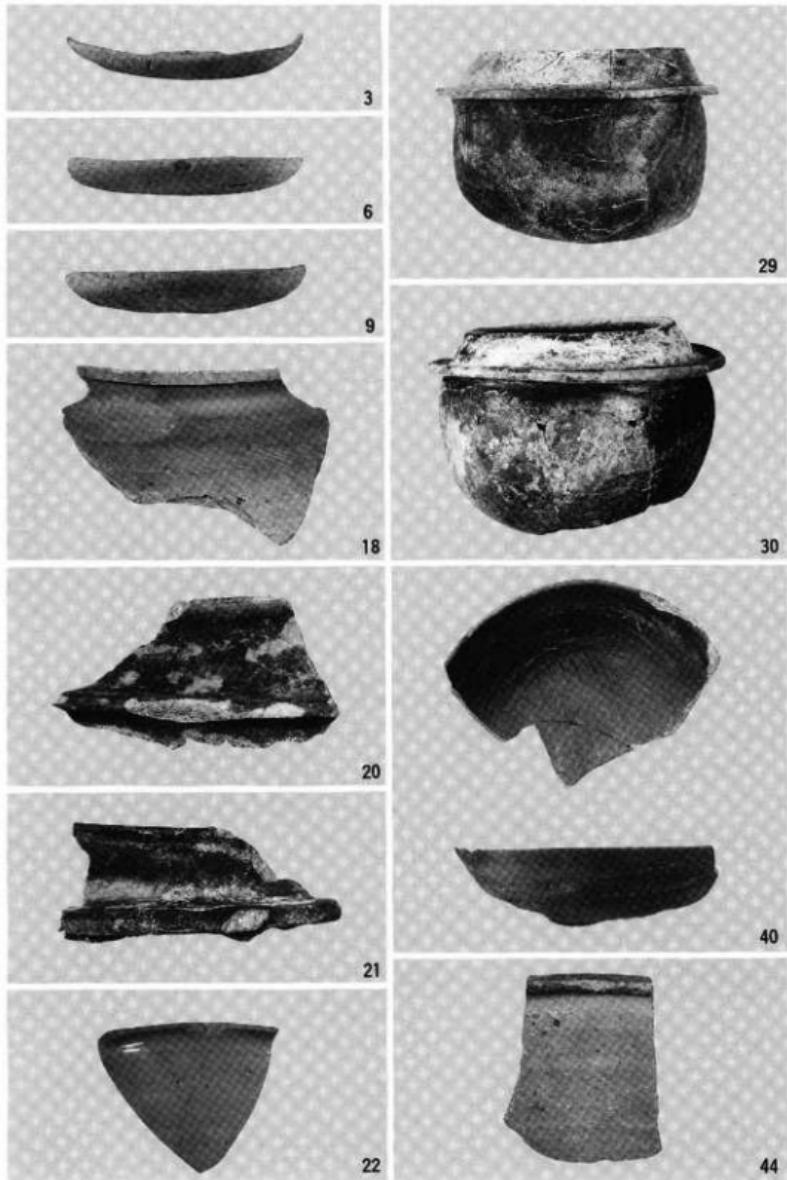
SD-14 (北から)



SD-14南部遺物出土状況(東から)



同上 北部遺物出土状況(東から)



SE-1 (3・6・9・18・20・21・22)・SE-2
(29・30)・SE-3 (40・44) 出土遺物



51



54



53



57



63



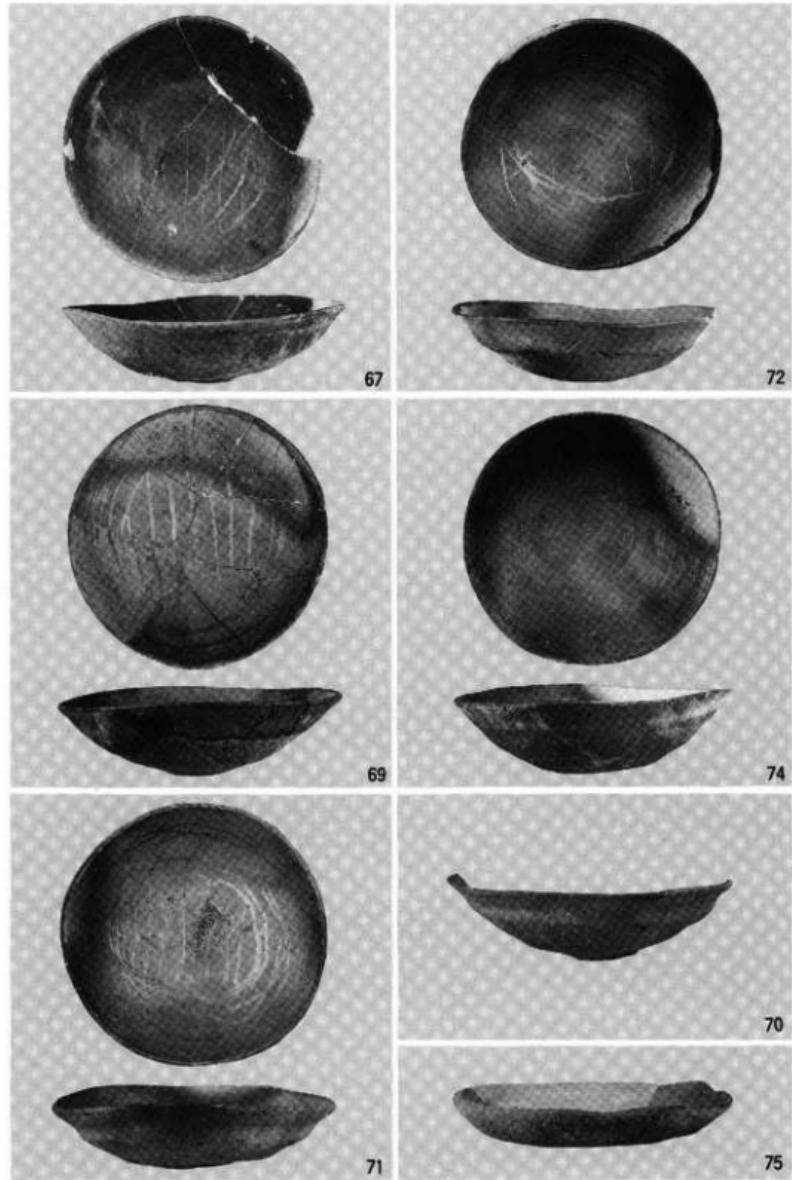
64

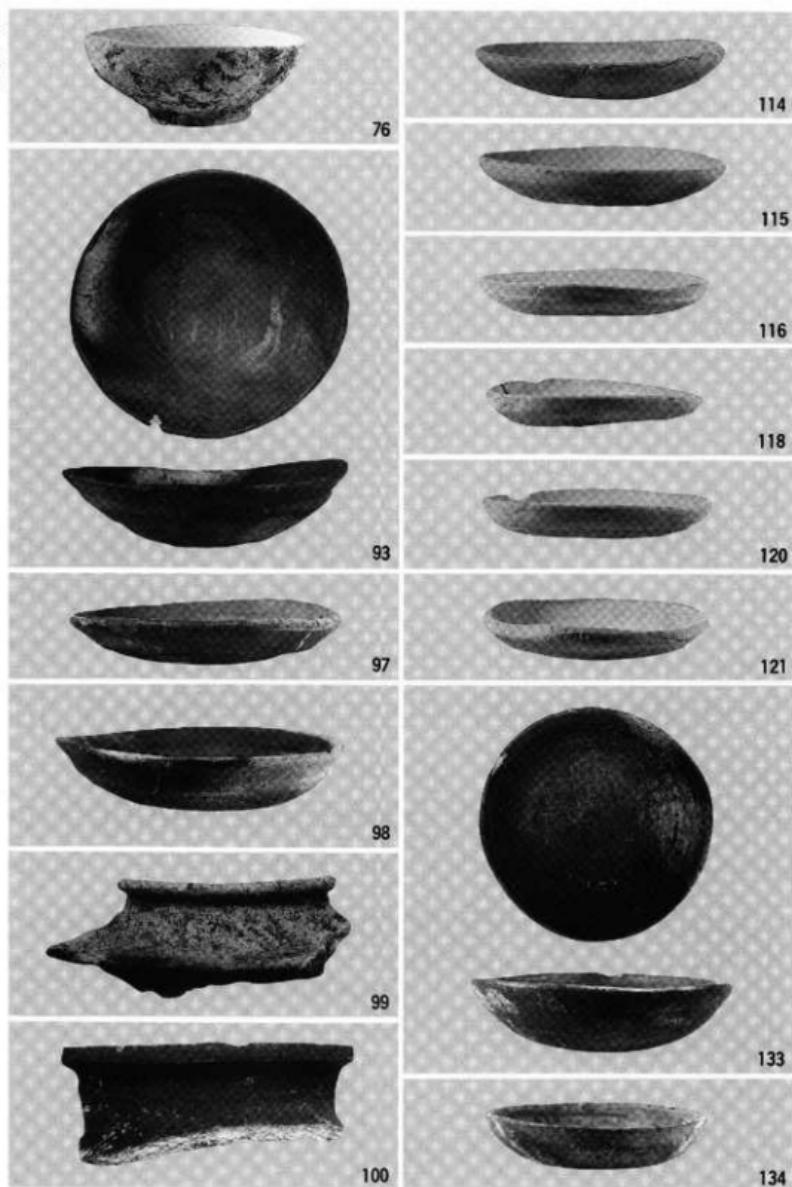


65

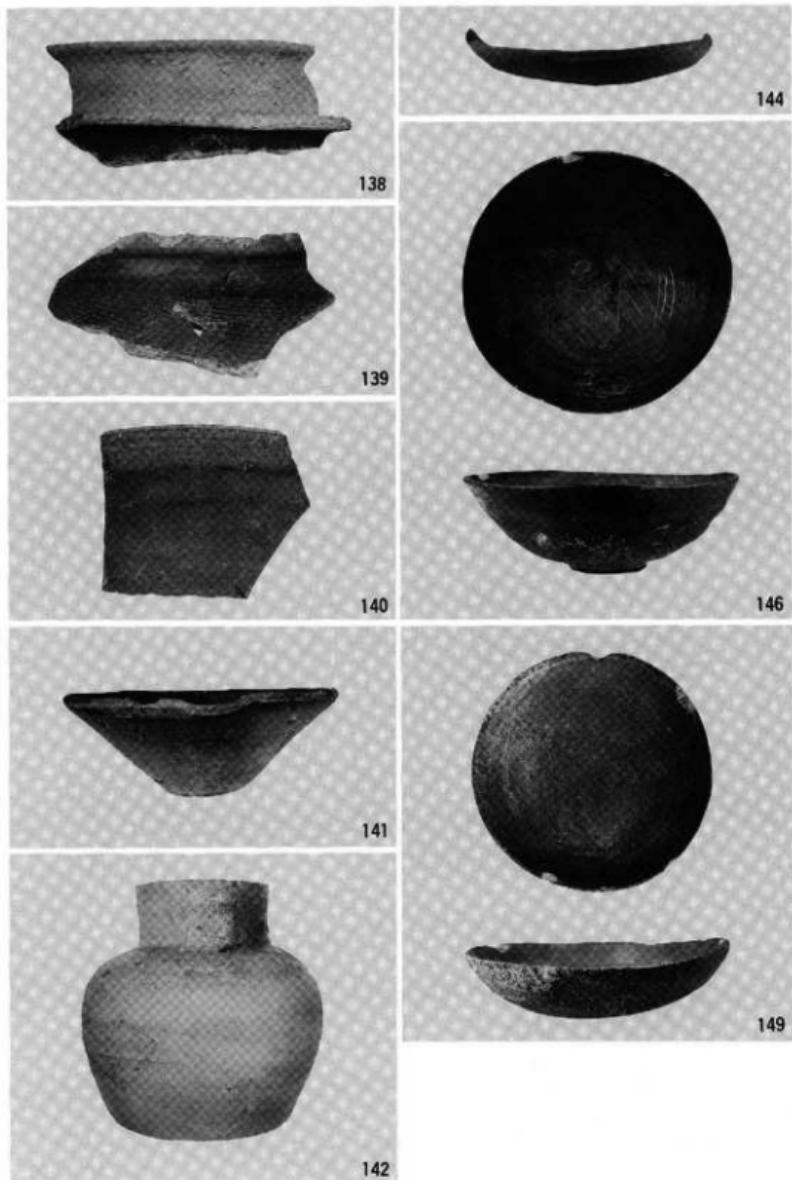


66

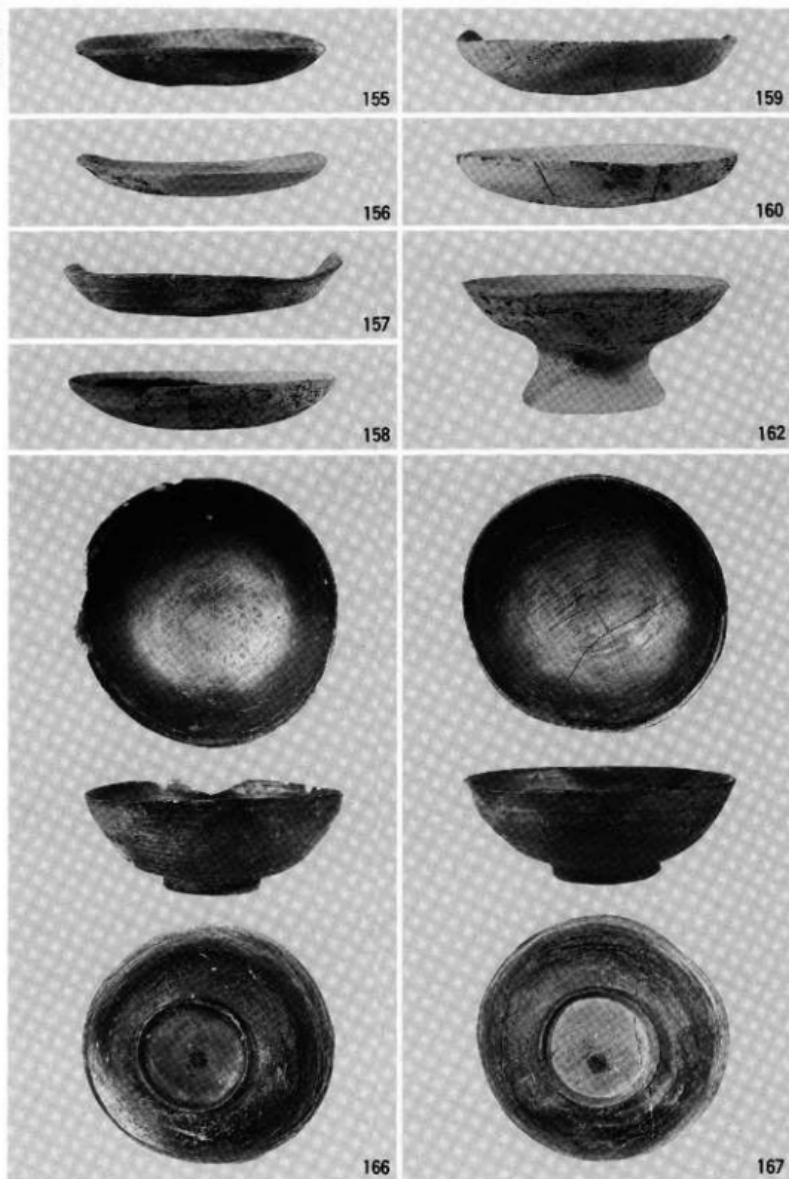




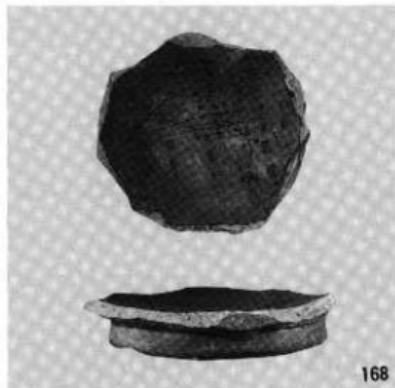
SE-9 (76)・SE-11 (93-97～100) SE-13
(114～116・118・120・121・133・134) 出土遺物



SE-13 (138~142) SK-2 (144)
SK-4 (146·149) 出土遺物



SK-5出土遺物 1



168



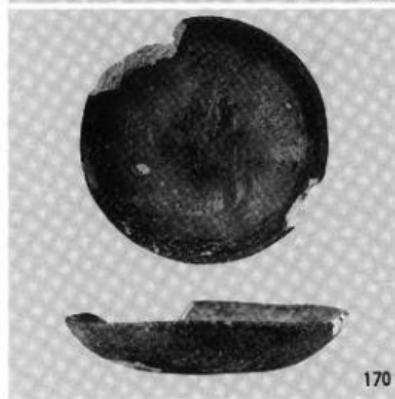
171



172

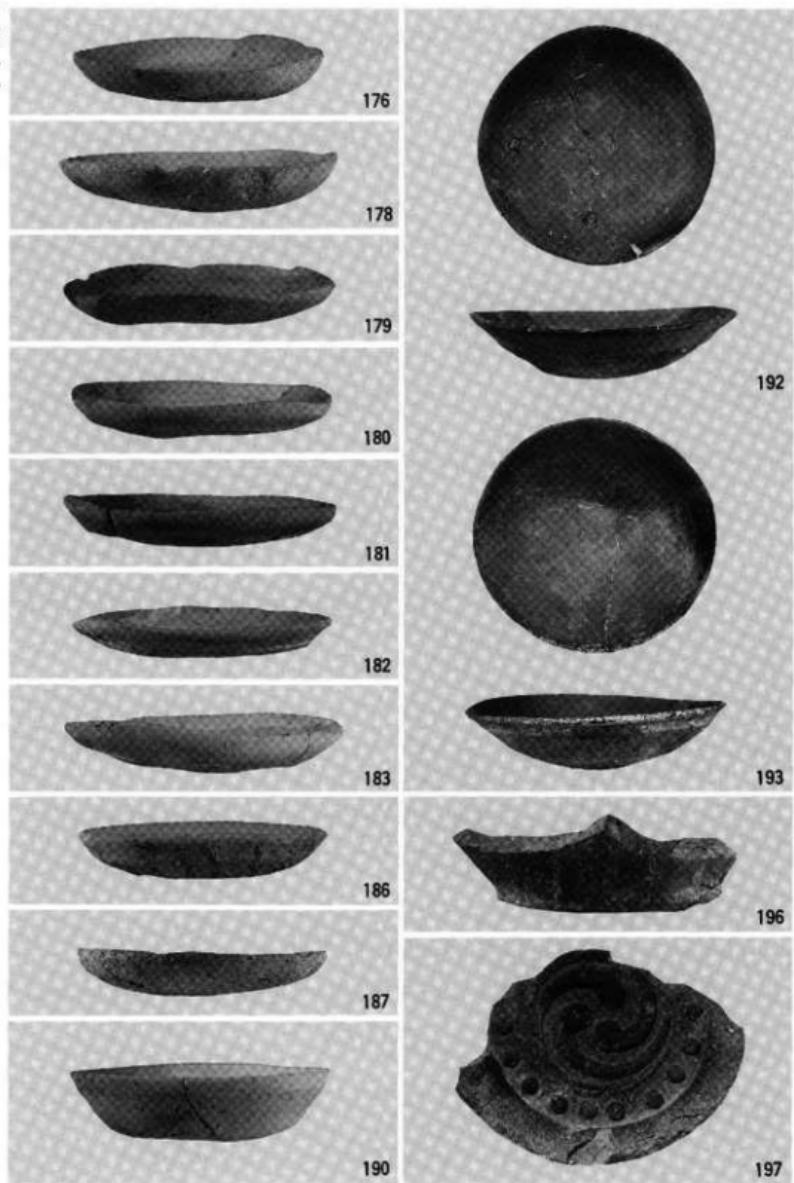


169

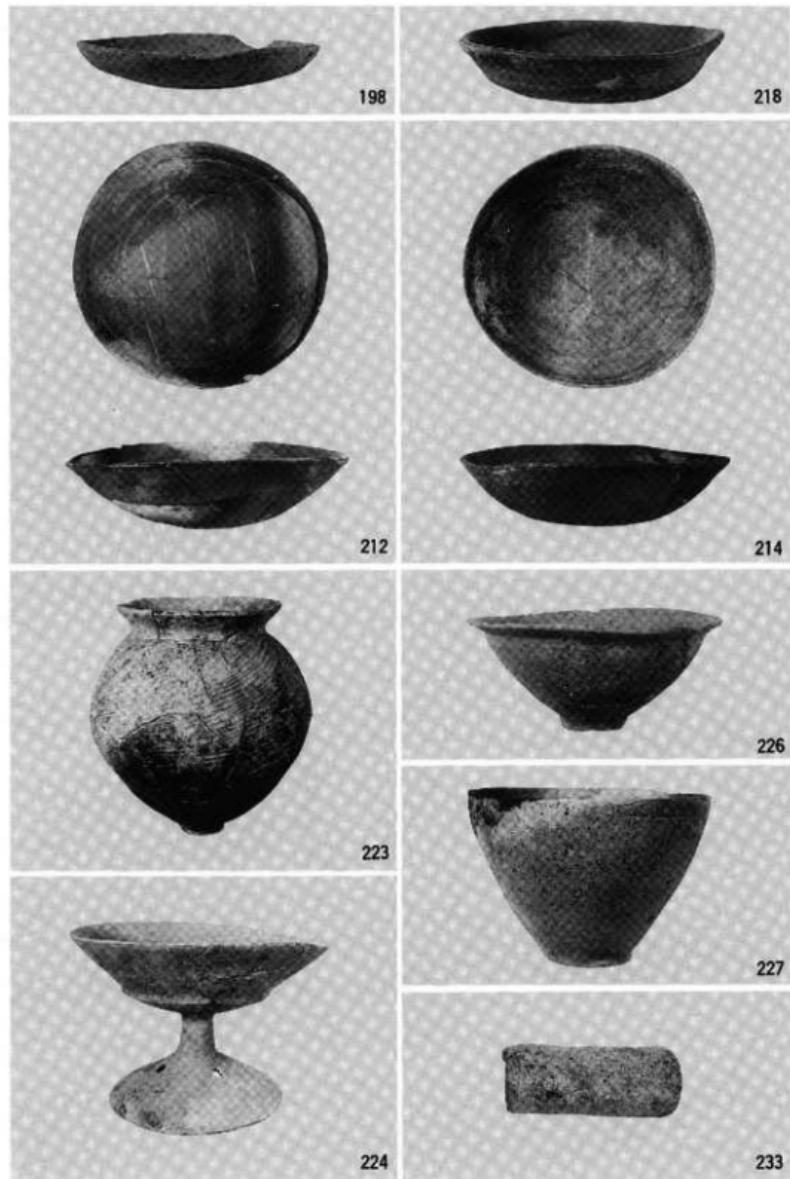


170

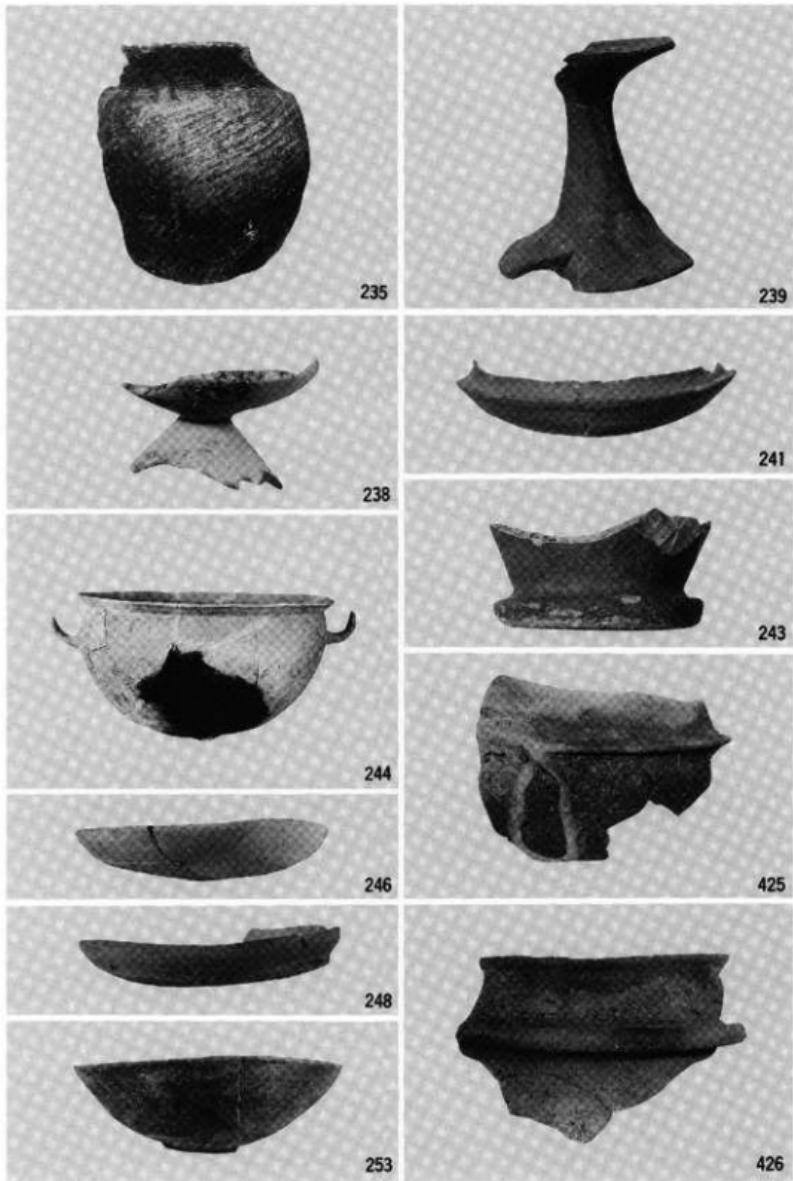
圖版二八



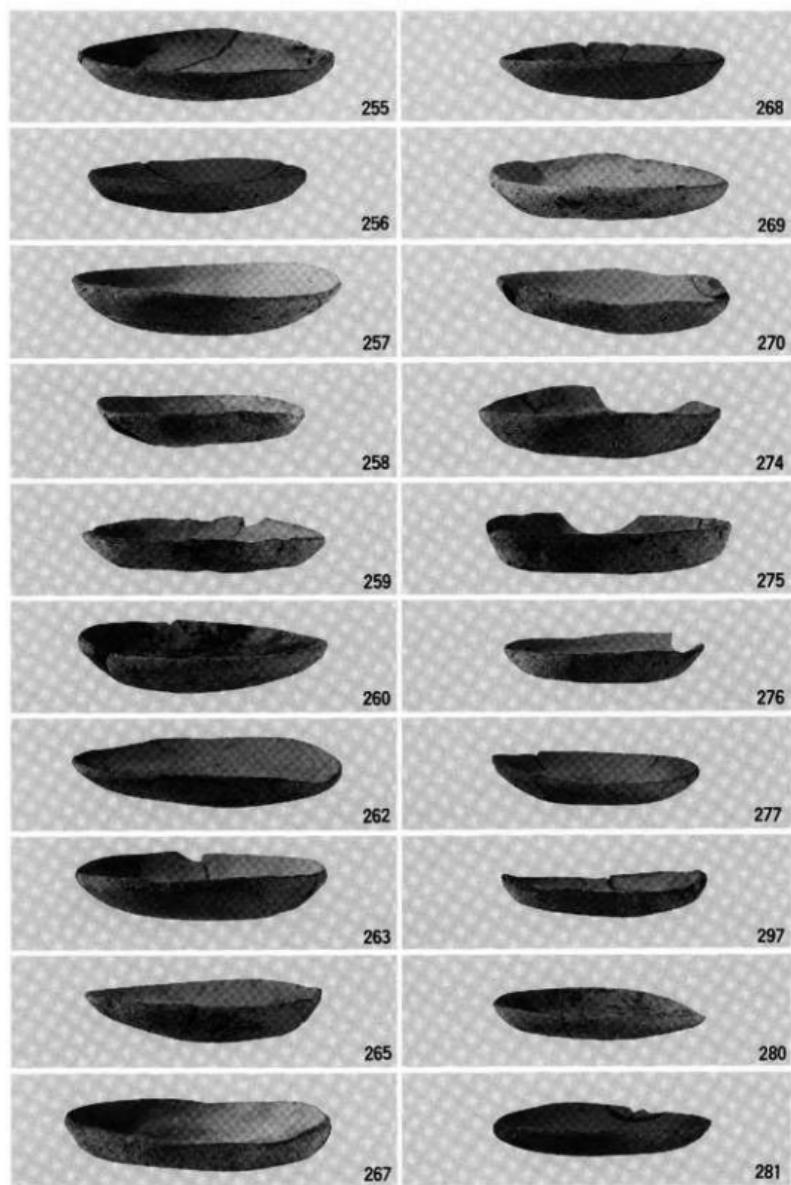
SK-7出土遺物

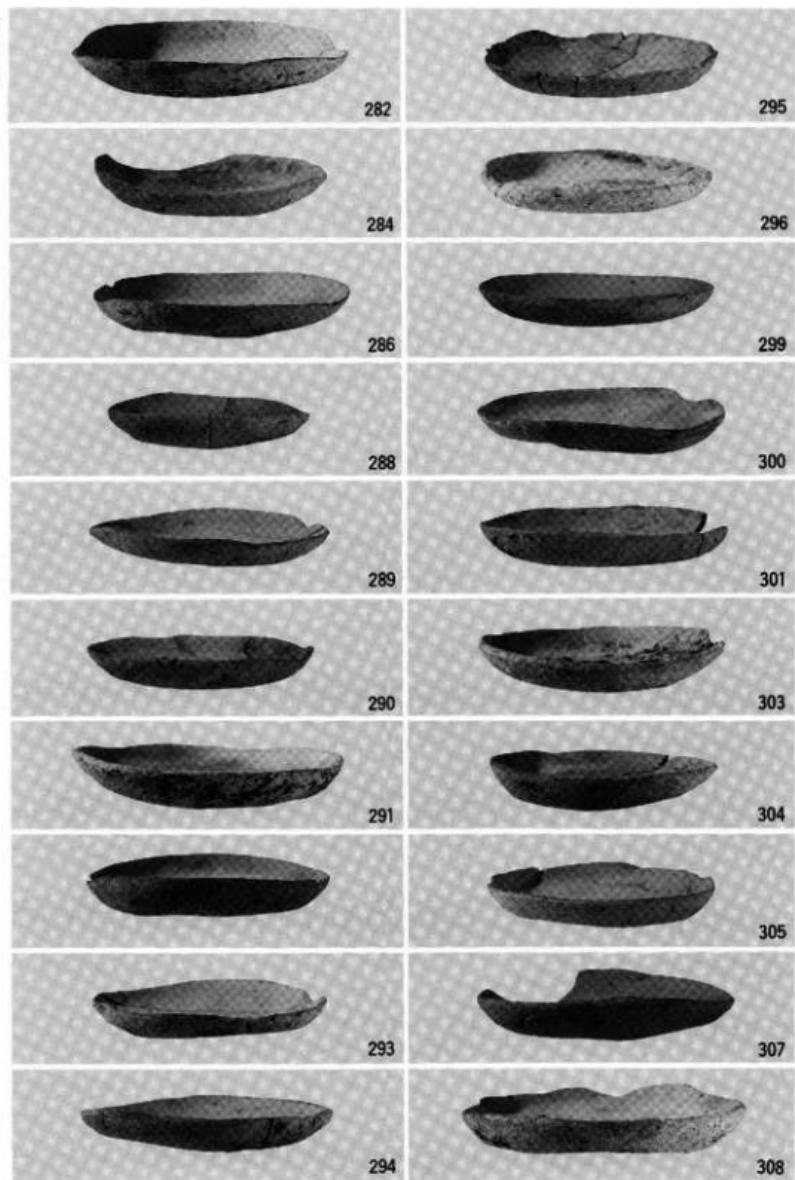


池狀遺構(198-212-214-218)・SD-1
(223-224-226-227-233)出土遺物

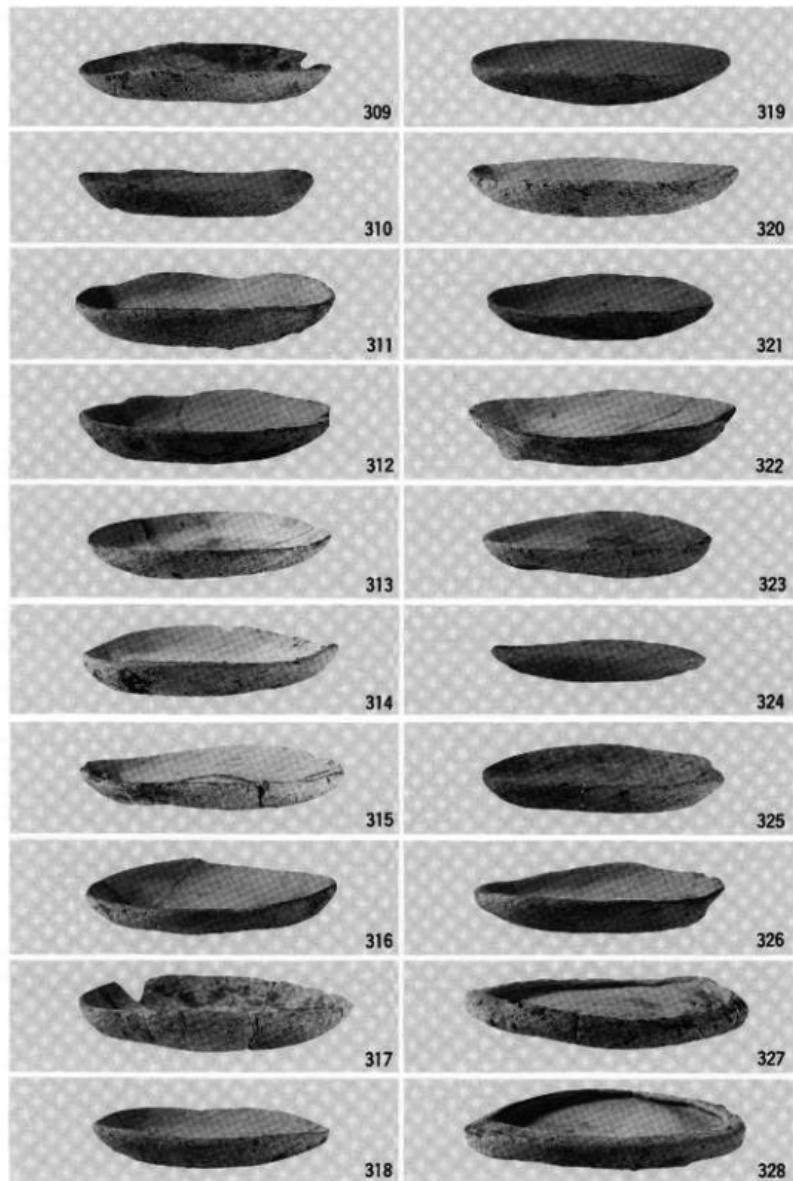


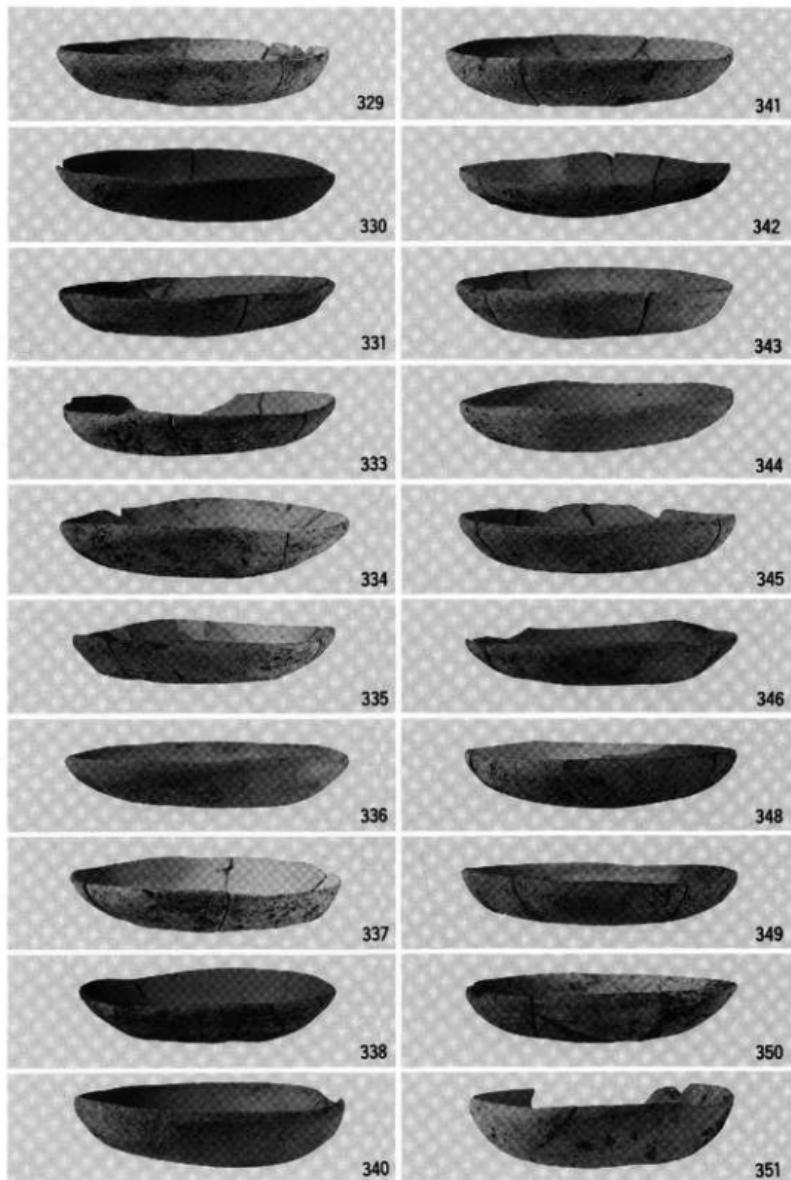
SD-2 (235·238·239·241·243·244) · SD-3
(246·248·253) · SP-16 (425·426) 出土遺物



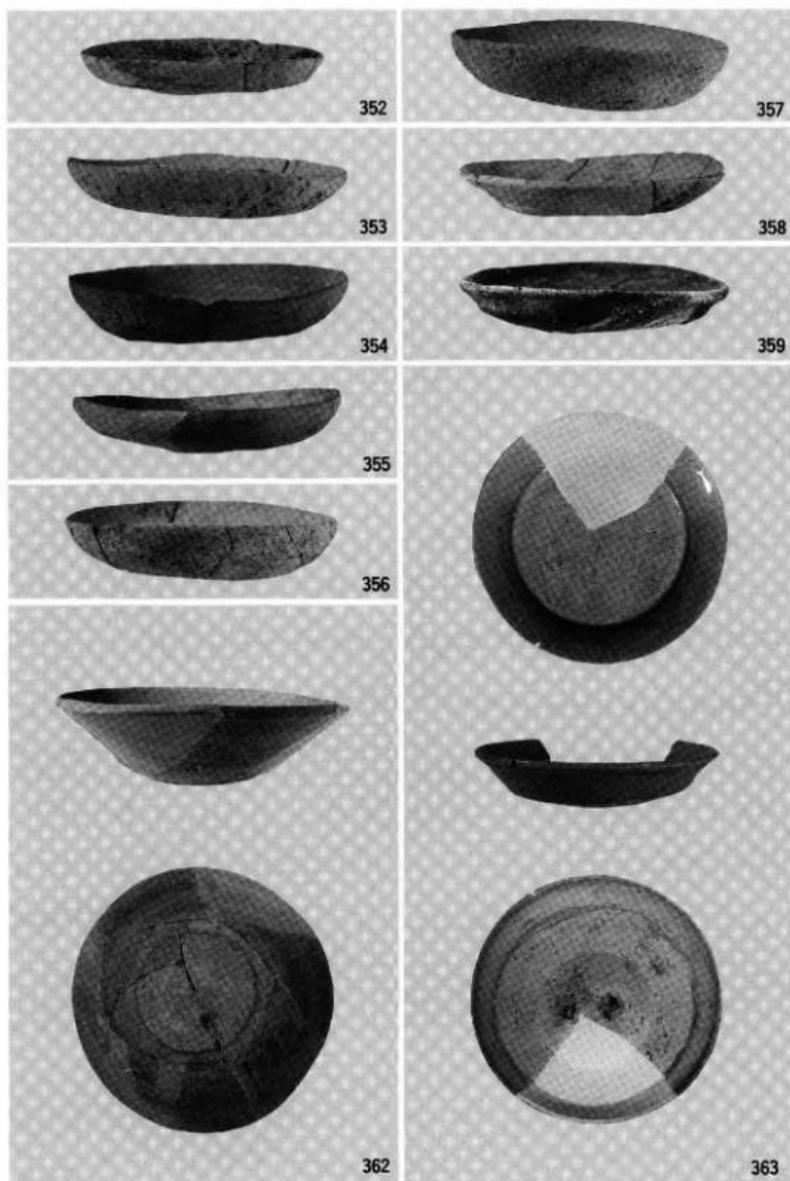


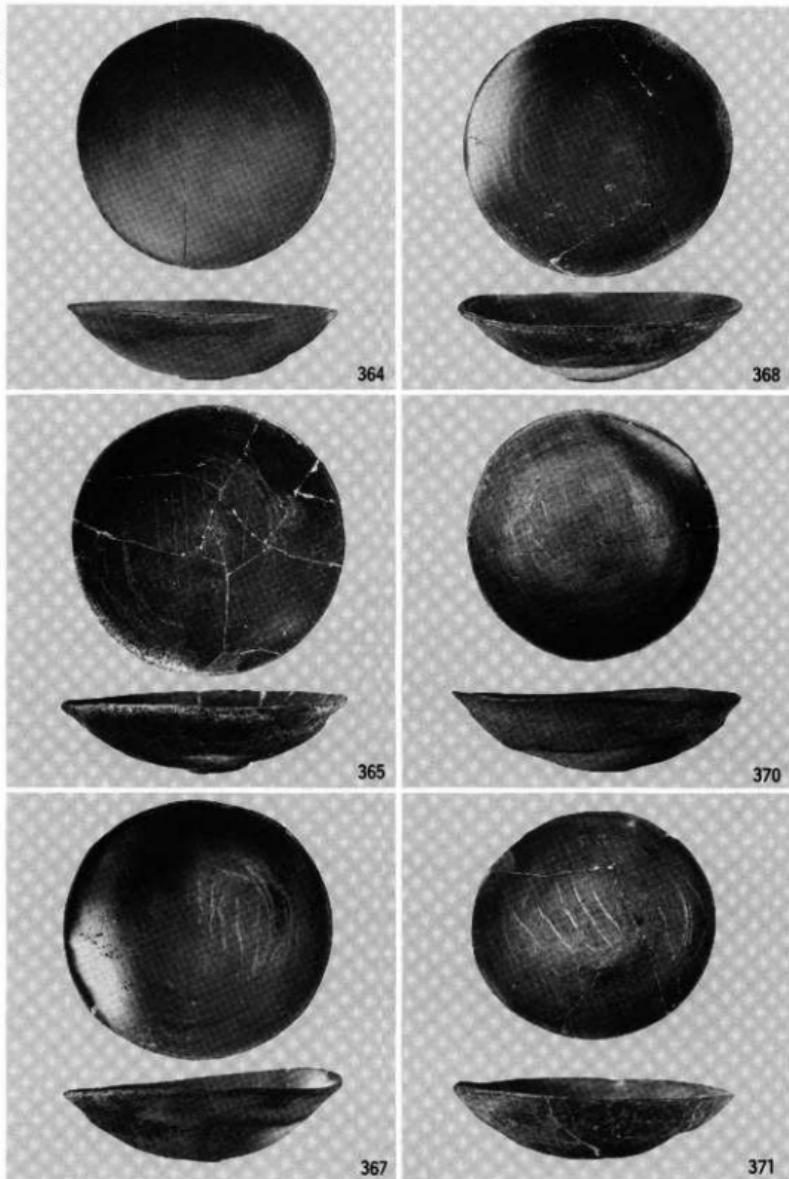
SD-14出土遺物 2

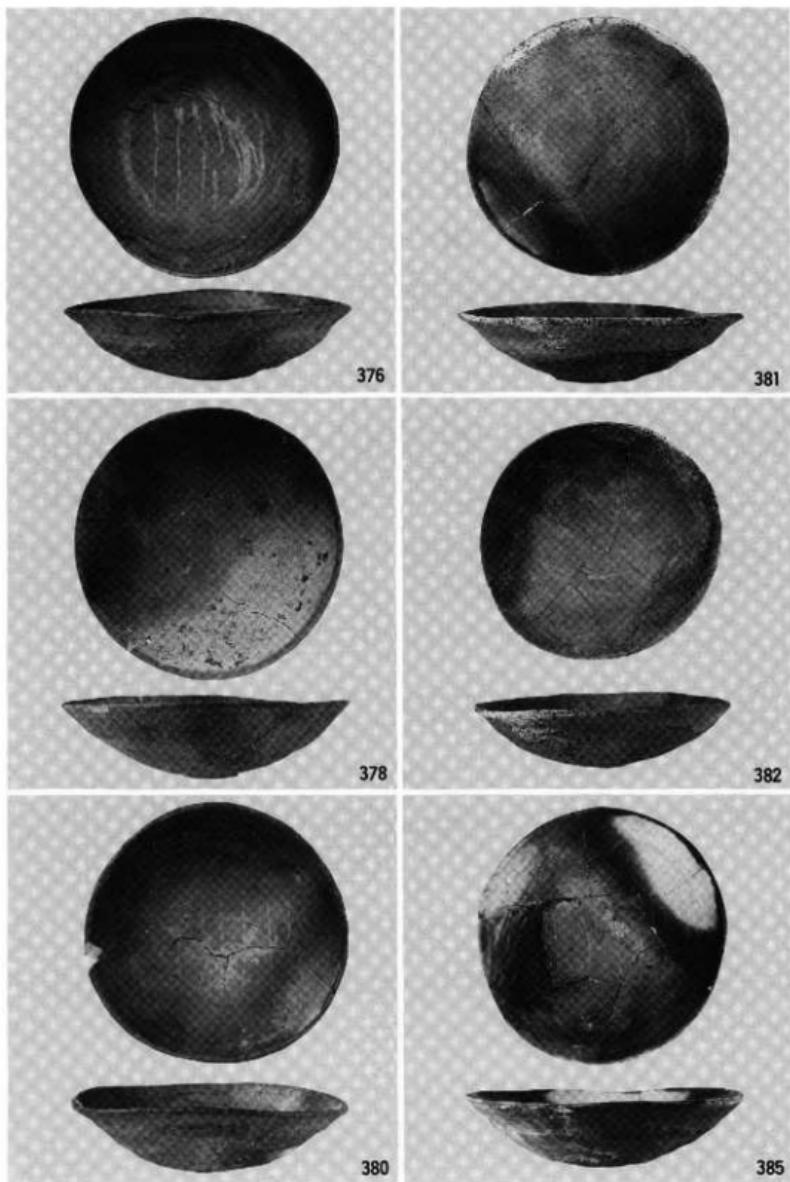


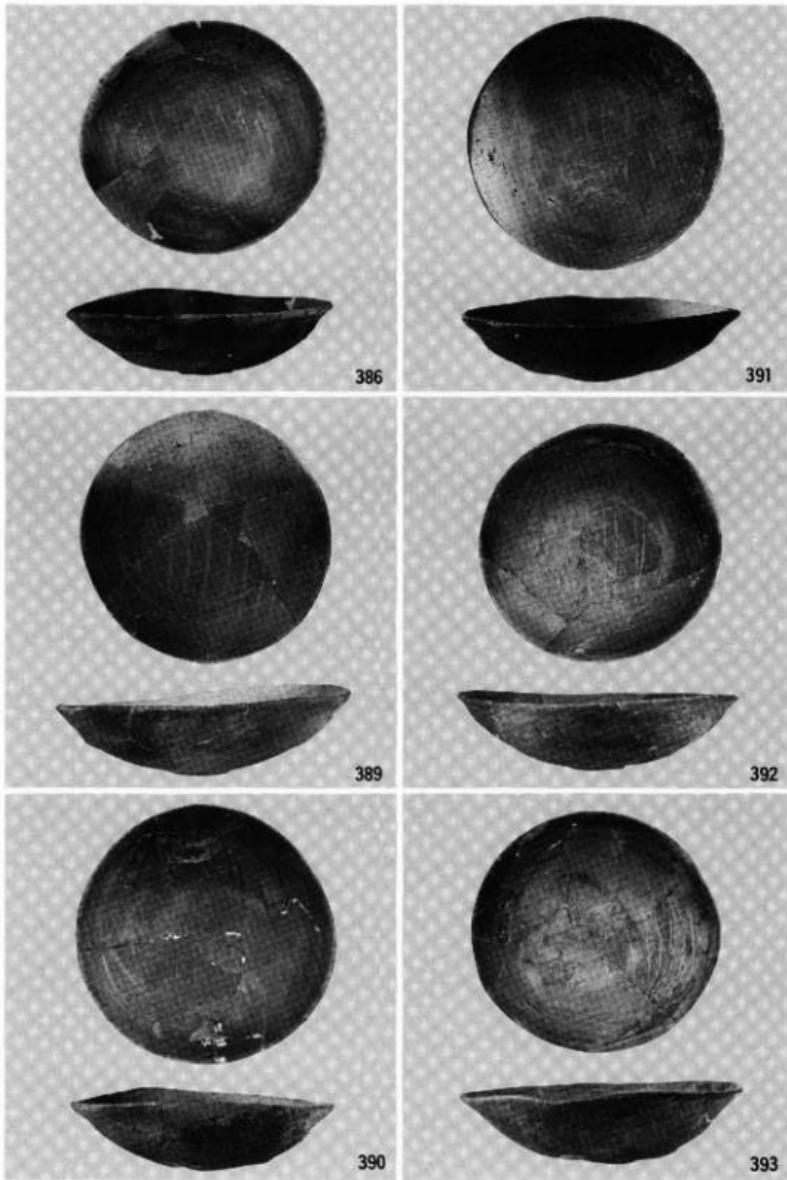


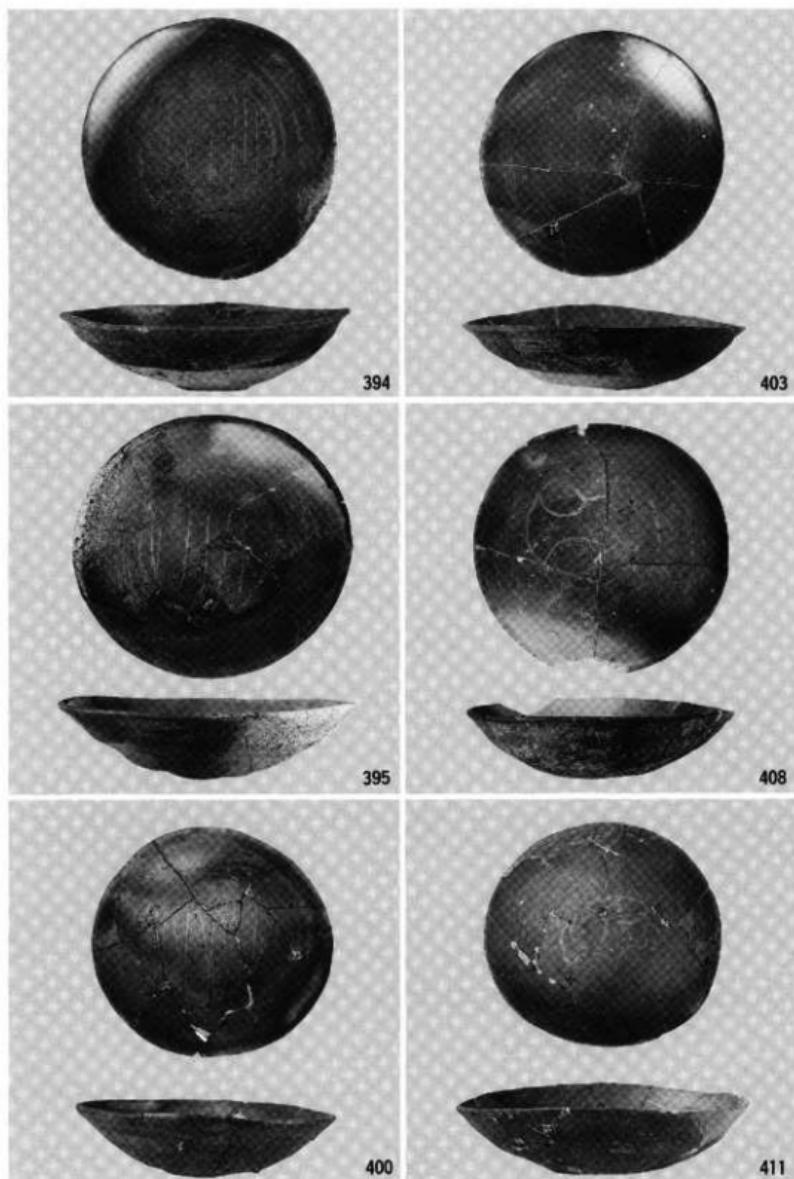
SD-14出土遺物 4

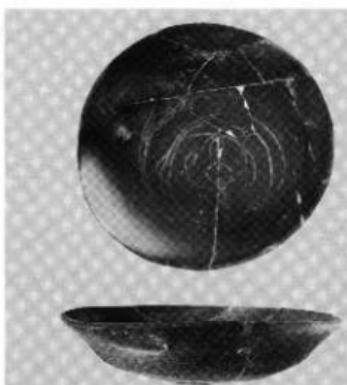












412



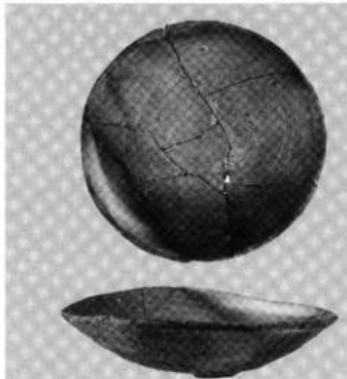
418



413



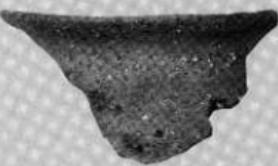
419

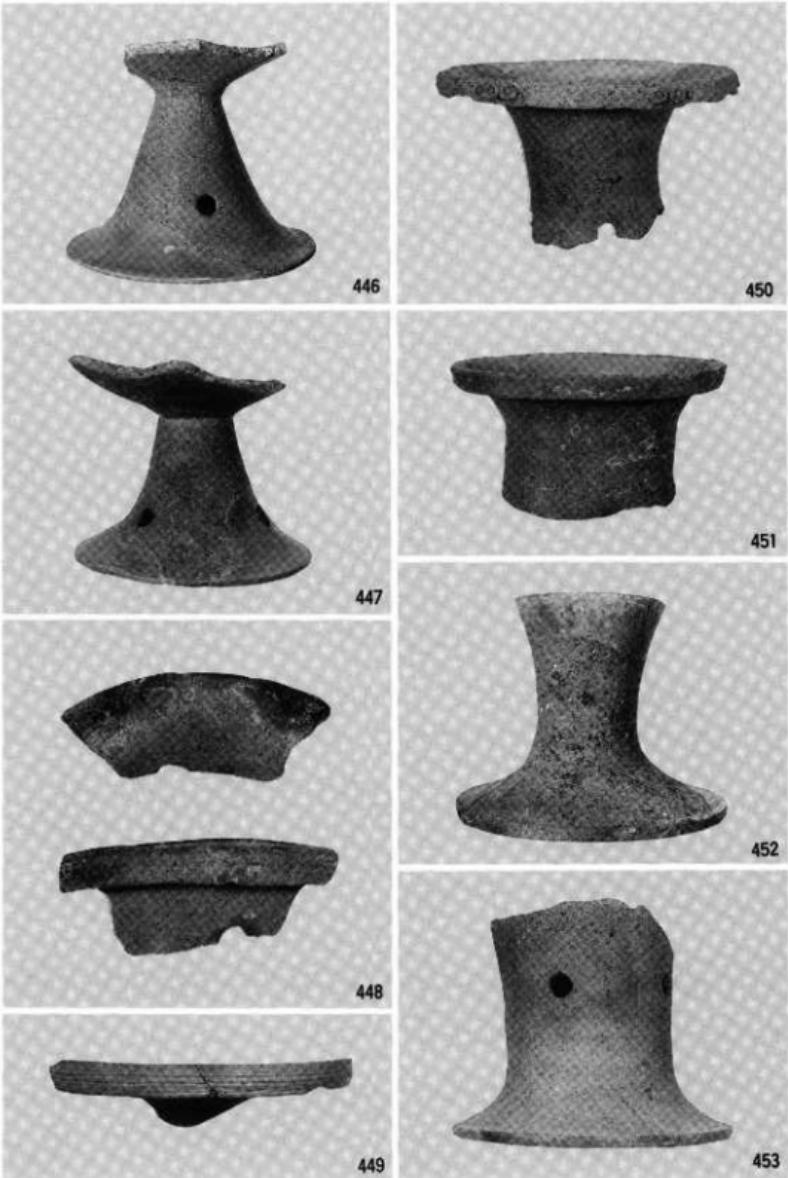


417

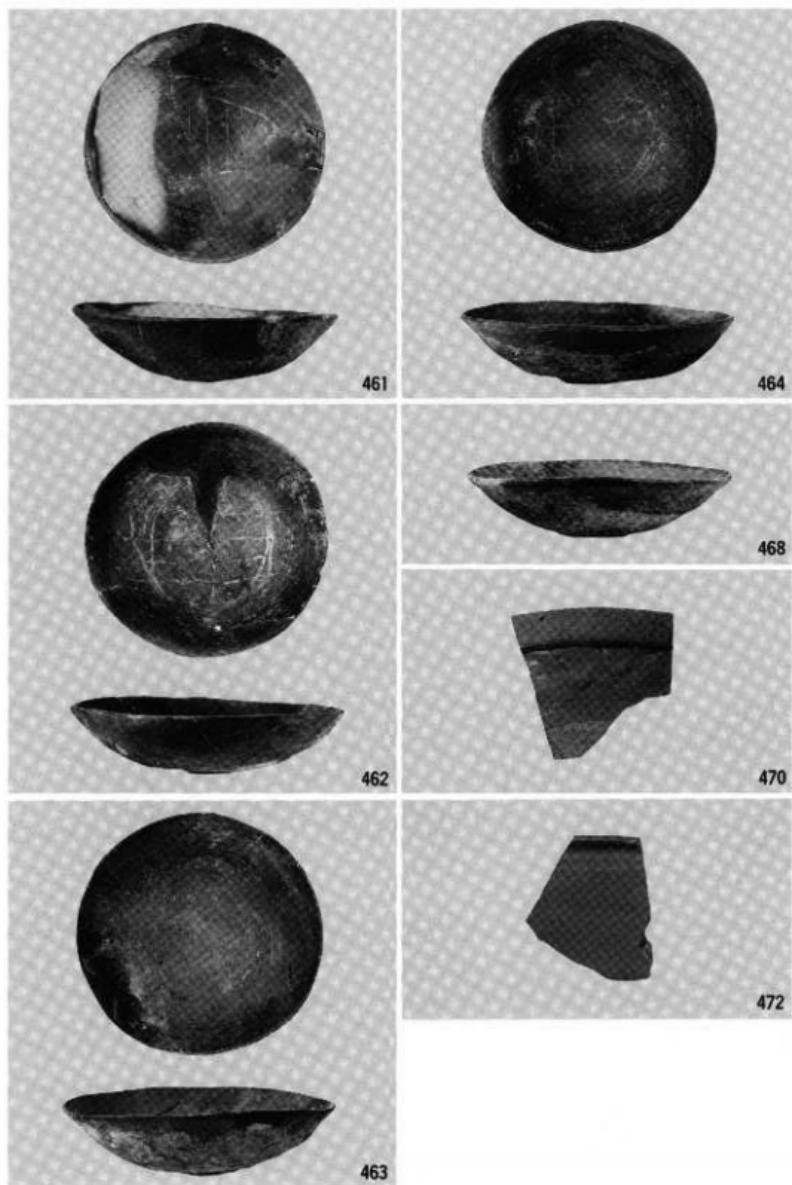


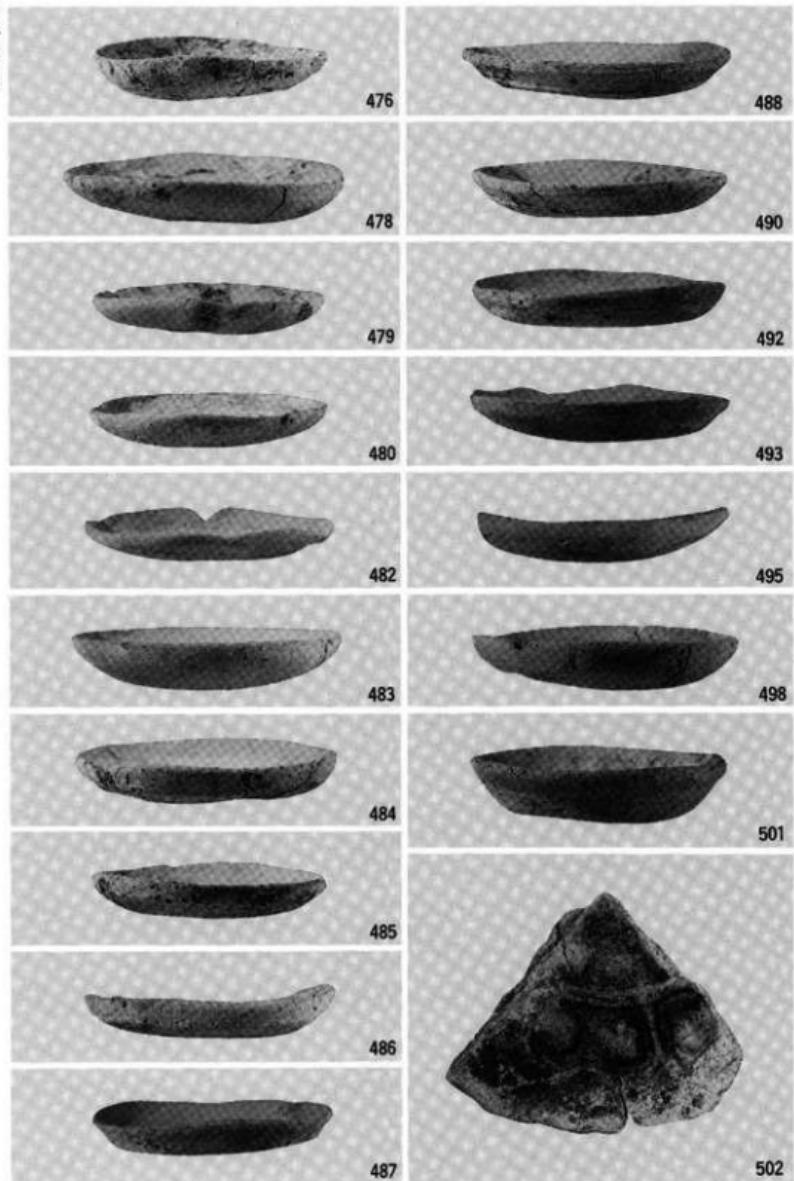
420





包含層出土遺物 2





包含層出土遺物 4

II 矢作遺跡(第2次調査)発掘調査概要報告

例　　言

1. 本書は、八尾市高美町4丁目141で実施した(社)八尾納税協会事務所新築に伴う発掘調査の概要報告である。
1. 現地調査は、昭和62年10月23日から11月18日まで、(財)八尾市文化財調査研究会が成海佳子を担当者として実施した。
1. 内業整理は、現地調査終了後隨時実施し、平成元年3月31日で終了した。
1. 現地調査・内業整理の参加者は以下の通りである（五十音字順）
　　麻田優・柏本幸寿・小林博司・田中明美・棚橋佐知子・松下哲也・森茂治・山内千恵子・
　　山田幸博

本文目次

第1章 調査概要.....	103
はじめに.....	103
調査方法.....	103
第2章 調査結果.....	104
地区割.....	104
層序.....	104
検出遺構と出土遺物.....	107
第3章 出土遺物観察表.....	120
第4章 まとめ.....	131

挿図目次

第1図 調査区設定図.....	103
第2図 半断面図.....	105-106
第3図 SK-1上層遺物検出状況平面図.....	107
第4図 SK-1・SD-1出土遺物実測図.....	110
第5図 SD-2・SD-6・SK-7・SD-8出土遺物実測図.....	111
第6図 SW-1遺物検出状況平面図.....	112
第7図 SW-1出土遺物実測図.....	113
第8図 NR-1出土遺物実測図1.....	114
第9図 NR-1出土遺物実測図2.....	115
第10図 包含層出土遺物実測図1.....	116
第11図 包含層出土遺物実測図2.....	117
第12図 SD-1・SD-3・包含層出土埴輪実測図.....	118
第13図 NR-1・包含層出土埴輪実測図.....	119
第14図 周辺の調査地.....	132

図版目次

- | | |
|---------------------------------|---|
| 図版一 調査区全景 | 図版六 S P - 1 |
| S D - 7 · S D - 8 | S P - 2 |
| 図版二 S D - 1 ~ S D - 4 | 図版七 S K - 1 · S D - 1 出土遺物 |
| S D - 3 · S D - 4 | 図版八 S D - 2 · S D - 6 · S D - 7
出土遺物 |
| 図版三 S D - 2 · S D - 3 · S D - 5 | 図版九 S W - 1 出土遺物 |
| S D - 2 · S D - 6 | 図版一〇 N R - 1 出土遺物 |
| 図版四 S K - 1 上層遺物検出状況 | 図版一一 N R - 1 出土物 |
| 同上 完掘 | 図版一二 包含層出土遺物 |
| 図版五 S W - 1 | 図版一三 包含層出土遺物 |
| 同上 鉄刀 | |



第1章 調査概要

はじめに

今回の調査は、廿八尾納稅協会事務所新築に伴って実施したもので、当研究会が矢作遺跡内で実施した調査の第2次調査にあたる。周辺の環境およびこれまでの調査の概略などは、前書「I 矢作遺跡第1次調査」に詳しいので、ここではふれない。

今回の調査地点は、八尾市教育委員会昭和60年度調査地（①）から南東約100m・第1次調査地（②）から南西約100mのきわめて近接した位置にあたる。また、今回報告の第2次調査終了後これまでに、当調査地（③）から半径約200m以内の近距離で、八尾市教育委員会による調査が4件実施されており（④～⑦）、数々の成果が得られている（第14図参照）。

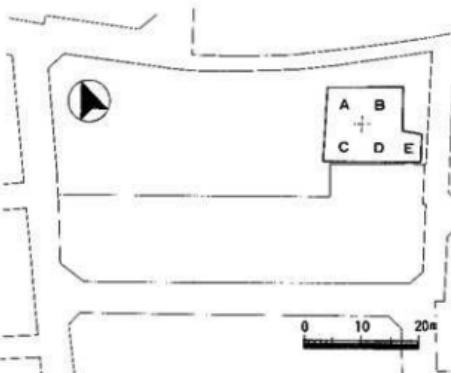
当調査地では、昭和62年7月24日に八尾市教育委員会による試掘調査が実施されており、その結果、古墳時代後期の遺物包含層が確認されたことから、当研究会へ全面発掘調査が依頼されたものである。
計1

調査方法

事務所建築予定地にあわせて、東西・南北14～15m程度の調査区を設定した。調査面積は約160m²である。調査区の南側には建物が接近しているため、この部分に土留めの矢板を打設した後、掘削を開始した。

掘削方法は、試掘調査の結果を参考にして、現地表下1.1～1.2mまで盛土・旧耕土等を機械掘削とし、以下の0.5～0.7mを手掘りとした。なお、第1次調査の結果から、複数の時期の造構の存在する可能性はあったが、日程等の事情から、一括して捉えることとした。

調査の結果、古墳時代前期（庄内式期）の土坑1基、古墳時代後期の溝6条・小穴2個、奈良時代の河川



第1図 調査区設定図

1条を検出した。

第2章 調査結果

地区割

調査区を中心杭で4分割した。地区名は、北西部をA区・東部をB区・南西部をC区・南東部をD区とし、南東角の突出部をE区と呼んだ（第1図参照）。

層序

基本となる層序は、第2図の算用数字（第0層～第8層）で表わした9層である。

第0層：近年の盛土。層厚0.8～0.9m。地表面の標高は10.3～10.4m。

第1層：灰色砂混粘質土。層厚0.1～0.2m。近年までの耕作土、上面の標高は9.5m前後。

第2層：緑灰色砂質土。層厚0.1～0.2m。耕土の床となる土で、層中には土器・陶磁器・瓦などの小破片が若干含まれている。

第3層：灰緑色粘質土。層厚0.05～0.4m耕作痕である「すき溝」が東西・南北方向に無数に掘り込まれている。層中には土器類の小破片がわずかに含まれている。

第4層：緑灰色疊混粘質土。層厚0.1～0.35m。第3層同様耕作痕が認められ、土器類の小破片を含んでいる。

第5層：黄茶色砂混粘質土。層厚0.05～0.15m。上面から奈良時代の河川が切り込んでおり、上面の標高は8.7～9.0m程度を指す。

第6層：茶褐色疊混シルト質粘土。層厚0.1～0.15m。古墳時代の遺物包含層で、疊とともに土師器・須恵器・埴輪などが比較的多量に含まれている。

第7層：黄灰色シルト。層厚0.1～0.4m。上面を調査対象面とした土層で、古墳時代の遺構ベースとなる。層中には弥生時代後期の土器を含む。上面の標高は8.5～8.8m程度を測る。

第8層：青灰色シルト～粗砂 層厚0.3m以上。弥生時代後期までの埋没河川の堆積状況を示す土層で、これまでに当遺跡東部で普遍的に認められている土層である。
註2

註1 八尾市教育委員会 「矢作遺跡発掘調査概要」「八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅱ」
：八尾市文化財調査報告18 1988.3

註2 八尾市教育委員会 「矢作遺跡発掘調査概要」「八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ」
：八尾市文化財調査報告17 1988.3



第2図 調査区平面図 たて1:40 よこ1:100

検出遺構と出土遺物

前述のように、古墳時代前期（庄内式期）・古墳時代・奈良時代の各時期の遺構を検出した。うちわけは、古墳時代前期が土坑1基（SK-1）、古墳時代後期が溝8条（SD-1～SD-8）・小穴2個（SP-1・SP-2）・土器集積1箇所（SW-1）、奈良時代が河川1条（NR-1）で、主な時期は古墳時代後期である。

<古墳時代前期>

土坑

SK-1 (B区・D区)

調査区中央部の東壁付近で検出した。南端の肩付近に鉢1～3・庄内甕4～6が集積しており、当初は土器集積と考え、土器を取り上げた後に土坑の掘り込みを確認したものである。

土坑の北側は奈良時代の河川で削られ、東部はそのほとんどが調査区外に至るため、全体の形状は不明であるが、東壁の観察をも含め、南北3.5m・深さ0.2m以上の規模があり、2段に掘り込まれている。内部には暗茶色縞混粘土が堆積している。

内部からの出土遺物には、庄内甕7～9などがあり、これらは南側のテラス状の部分にまとまっていた。また、ここからは前述の1～6と接合できるものが出土している。なお、上部で検出したもののうち、鉢1と2は2つ重なった状態で出土している。

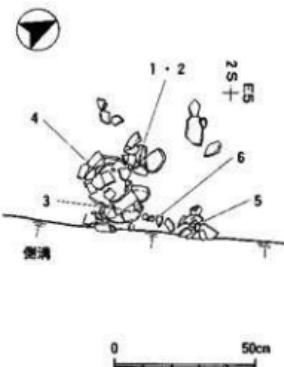
<古墳時代後期>

溝

SD-1 (A区・C区)

調査区西部中央で検出した。南西から北東への流路を持つものと考えられるが、北東部は奈良時代の河川NR-1によって削られ、南西は調査区外へ至る。検出長5m・幅0.9～1.4m・深さ0.3～0.4mを測り、断面の形状は逆台形で底部は平坦である。内部には、上層に丁層黄茶色粘土・下層にK層茶褐色縞混粘土が堆積している。

このうち、下層のK層から、土師器甕13、須恵器甕14、杯蓋15、杯身16、高杯17・18、埴輪121・122などが比較的多量に出土している。これらのほか、古い時期のものとして、庄内甕10・11、土師器甕12などが混入している。



第3図 SK-1上層遺物検出状況平面図

SD-2 (C区・D区)

調査区中央付近で検出した。ほぼ東西方向に伸び、西から東への流路を持つものと考えられる。検出長7m・幅0.3~0.6m・深さ0.05~0.12mを測る。西端はSD-1に切られ、南側ではSD-4・SD-5と合流している。また、西端から約2mには、小穴SP-1が掘り込まれている。なお、東端は試掘坑に一致していることから、SD-6との関係は不明である。

内部にはM層灰色粘土が堆積しており、須恵器長頸壺20の他、土師器・須恵器・埴輪などの小破片が含まれている。ここでも、SD-1同様、庄内式期の小型器台19をはじめとして、古い時期の土器片が認められる。

SD-3 (C区・D区)

調査区南部で検出した。南西から東への流路を持つものと考えられる。調査区南西隅から北へ3m伸びた後ほぼ直角に曲がり、SD-2の南側を平行に東へ伸びるが、南部・東部はともに調査区外へ至る。また、SD-4・SD-5・SD-6がこの溝に直交して構築されているが、それほどに時期差はないものと考えられる。検出長13m程度を測り、南部～西部は幅1.0~1.2mで屈曲部外側の西～北岸にはテラス状の段を持ち、中央部～東部は幅0.2~0.6mで東部の南岸にテラス状の段を持つ。深さは0.2m前後を測る。

内部には、上層にM層灰色粘土、下層にQ層灰黄色粘土が堆積しており、上層のM層から、土師器・須恵器・埴輪123・124等の小破片が若干出土している。

SD-4 (C区)

調査区南部で検出した。SD-3南西部の東側を平行して南北に伸びるもので、SD-3を切って直交した後、北端はSD-2と合流する。検出長4.5m・幅0.15~0.3m・深さ0.1~0.15mを測る。

内部にはM層灰色粘土が堆積しており、土師器・須恵器・埴輪等の小破片がごくわずかに含まれている。

SD-5 (D区)

調査区南部中央で検出した。SD-4と同様ほぼ南北に伸び、SD-3と直交した後、北端はSD-2に合流している。北端から1mの西岸には、SP-2が構築されている。検出長5m・幅0.25~0.5m・深さ0.07~0.1mを測る。

内部にはM層灰色粘土が堆積しており、土師器・須恵器・埴輪等の小破片がごくわずかに含まれている。

SD-6 (B区・D区)

調査区東部で検出した。ほぼ南北に伸び、南から北への流路を持つものと考えられる。SD-3と直交した後、北端はNR-1によって削られている。検出長8m・幅0.6~1.2m・深さ

0.05~0.15mを測る。SD-2との合流点付近に試掘坑があり不明瞭であるが、この部分で屈曲し、幅を減じている。

内部にはM層灰色粘土が堆積し、南部で土師器壺21・長頸壺22・壺24・砥石23の他、須恵器壺体部2個体分などがまとまって出土している。

この溝の北部東岸から調査区東端にかけて、後述する遺物の集積SW-1が認められたが、SD-2・SD-6とSW-1との関係は不明である。

SD-7 (E区)

調査区南東部で検出した。ほぼ南北に伸びるが、両端はともに調査区外へ至る。検出長2.5m・幅0.7~0.9m・深さ0.2~0.3mを測る。

内部には、上層にM層灰色粘土、下層にN層青灰色シルトが堆積している。このうち、上層のM層から、土師器平底鉢25・杯26のほか、土師器・須恵器の小破片がごくわずかに出土している。

SD-8 (E区)

調査区南東隅、SD-7のさらに東側で検出した。ごく一部を検出しただけで、全体の形状や規模などは不明であるが、幅1.6m以上・深さ0.1m以上を測る。

内部には、上層にM層灰色粘土が堆積し、下層にはO層灰色粗砂~礫、P層青灰色シルトなどが複雑に堆積している。遺物は主にG層から、土師器杯27のほか、土師器・須恵器・埴輪等の磨耗をうけた小破片が若干出土している。

小穴

SP-1 (C区)

調査区中央部の南西寄りで検出した。SD-2を切り込んで構築されている。径0.6m前後・深さ0.2mを測り、上面の形状はほぼ円形、断面の形状は逆台形で、柱痕は認められなかった。

内部にはM層灰色粘土が堆積しており、土師器・須恵器の小破片が各1点ずつ出土している。

SP-2 (D区)

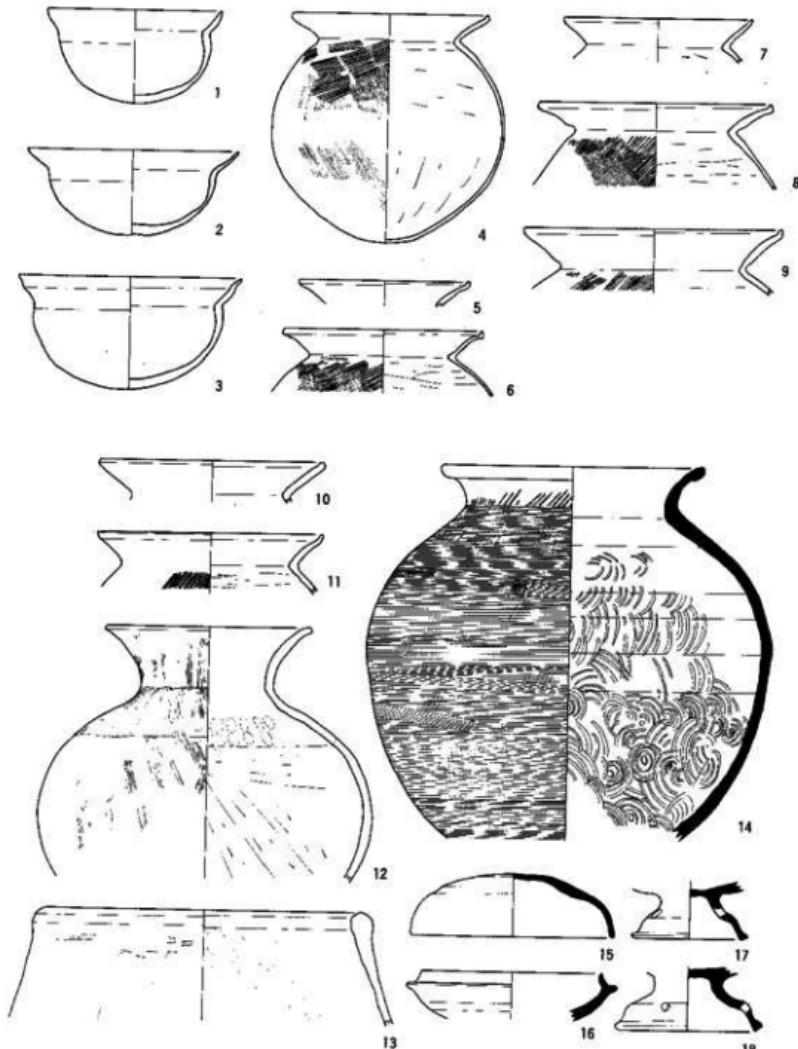
調査区中央部の南東寄りで検出した。SD-5北部の西岸を切り込んで構築されている。径0.3m・深さ0.1m前後を測り、上面の形状はほぼ円形、断面の形状は浅い半円形である。

内部にはM層灰色粘土が堆積しており、遺物は出土していない。

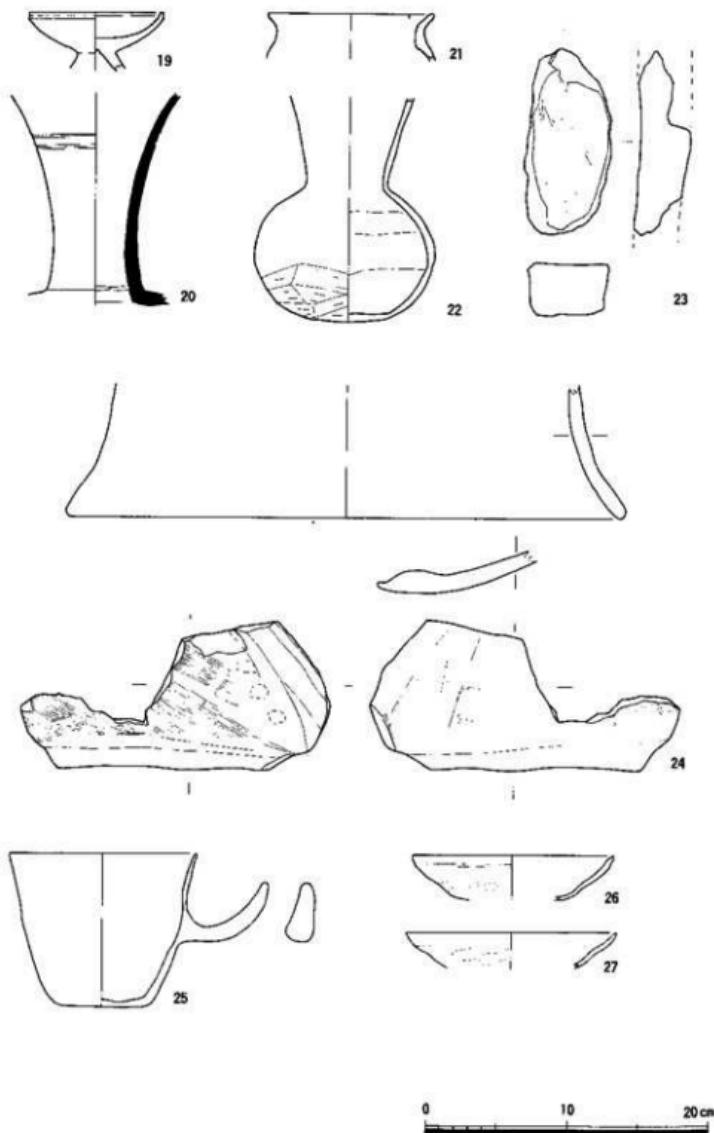
土器集積

SW-1 (B区)

前述のように、SD-6の北部東岸から調査区中央部の東端にかけて、須恵器を主とする遺物の集積を検出した。範囲は東西1.3m・南北0.7m程度に広がっている。器種には、土師器小型杯28・須恵器壺29・30・杯蓋31~33・高杯34・器台35・土師器羽釜36・鉄刀37などがある。



第4図 SK-1 (1~9), SD-1 (10~18) 出土遺物実測図



第5図 SD-2 (19,20)、SD-6 (21~24)、SD-7 (25,26)、SD-8 (27)出土遺物実測図

試掘調査で検出した土師器高杯・須恵器杯身なども、この集積内のものであろうと考えられる。

鉄刀37は柄を南、きっさきを北、刀を東に向けた状態で検出され、すぐ北側には土師器小型杯28が伏せられていた。須恵器壺29・杯蓋32・高杯34・土師器羽釜36は、SD-6の東岸近くにまとまっていた。これらの遺物が元位置を保っているとすれば、明らかに古墳の副葬品であるといえるが、埋葬施設は確認できていない。

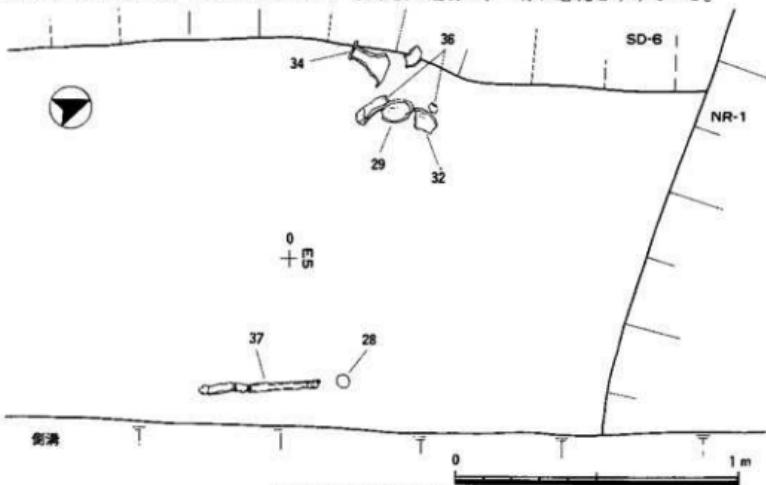
<奈良時代>

河川

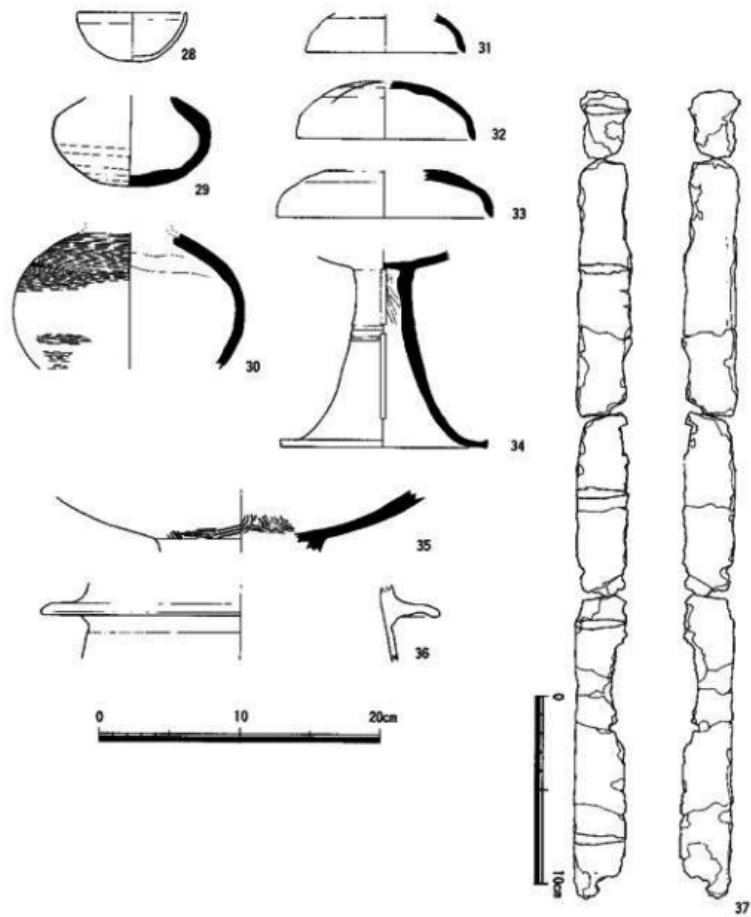
NR-1 (A区・B区)

調査区の北部で河川の南岸を検出した。東部ではSK-1・SD-6を切り、西部ではSD-1を切っている。全体的にみれば東から西への流路を持ち、深さ0.3~1.0m程度を測る。南岸に沿った幅1~2m程度の範囲は特に深く、西部にも北から南西へ向かう幅1.0~2.0mの深みが認められ、河川の中でも特に流れの激しい部分と考えることができる。

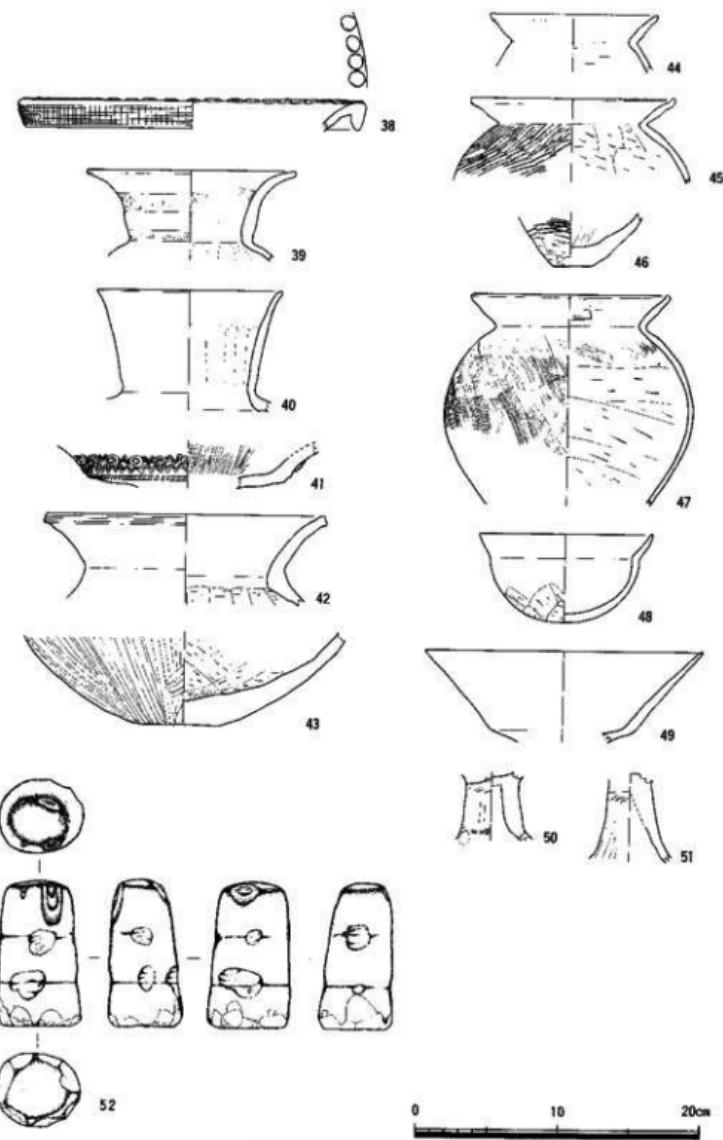
内部には、A層赤茶色礫混粘土、B層灰茶色砂～礫混シルト、C層灰色微砂～中砂、D層灰色～青灰色シルト、E層黒灰色粘土混疊、F層灰色粘土などが堆積している。このうち、上層の3層A層～C層は概ね水平に堆積しているが、以下の層は複雑な堆積状況を示している。遺物はA層・B層・E層から出土しているが、弥生時代中期～古墳時代前期のもの（38~52）はE層に集中しており、古墳時代後期～奈良時代に至るもの（53~82・128~138）は、A層・B層から出土している。これらは河川内の二次堆積の遺物で、一様に磨耗をうけている。



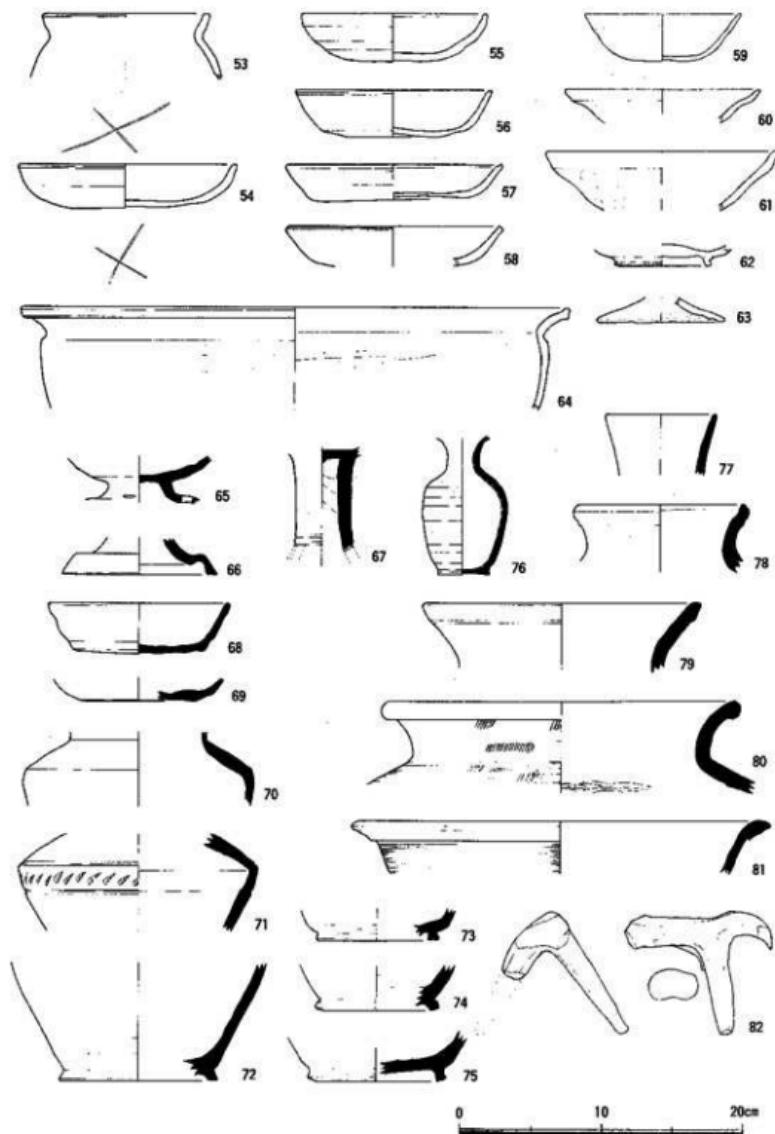
第6図 SW-1遺物検出状況平面図



第7図 SW-1出土遺物実測図



第8図 NR-1出土遺物実測図



第9図 NR-1出土遺物実測図2

これらのうち、特記すべきものとしては、形象埴輪128～134・土馬82などがあげられる。前者には、鶏形埴輪128・家形埴輪129・盾形埴輪？133などが認められ、SW-1の資料と同様、近隣に古墳のあることを裏付ける資料といえる。後者は河川の時期に一致するもので、水に関する祭祀を想起させる資料である。

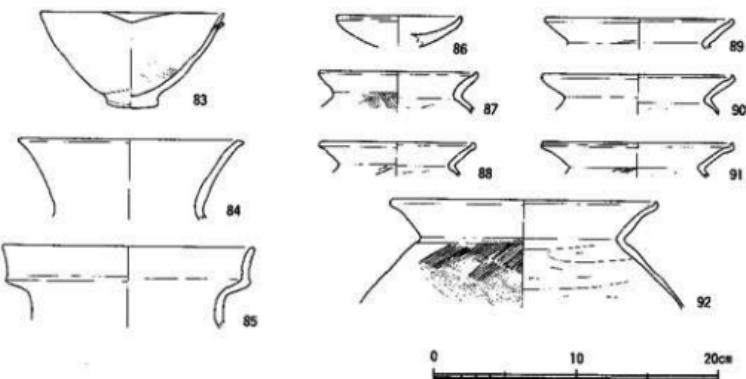
＜包含層出土遺物＞

第2層～第6層からの出土遺物はコンテナに各1箱ずつ出土している。このうち第2層～第5層出土のものはほとんどが磨耗をうけた小破片である。ここでは、第6層および遺構ベースとなる第7層出土のものに限ってとりあげた。

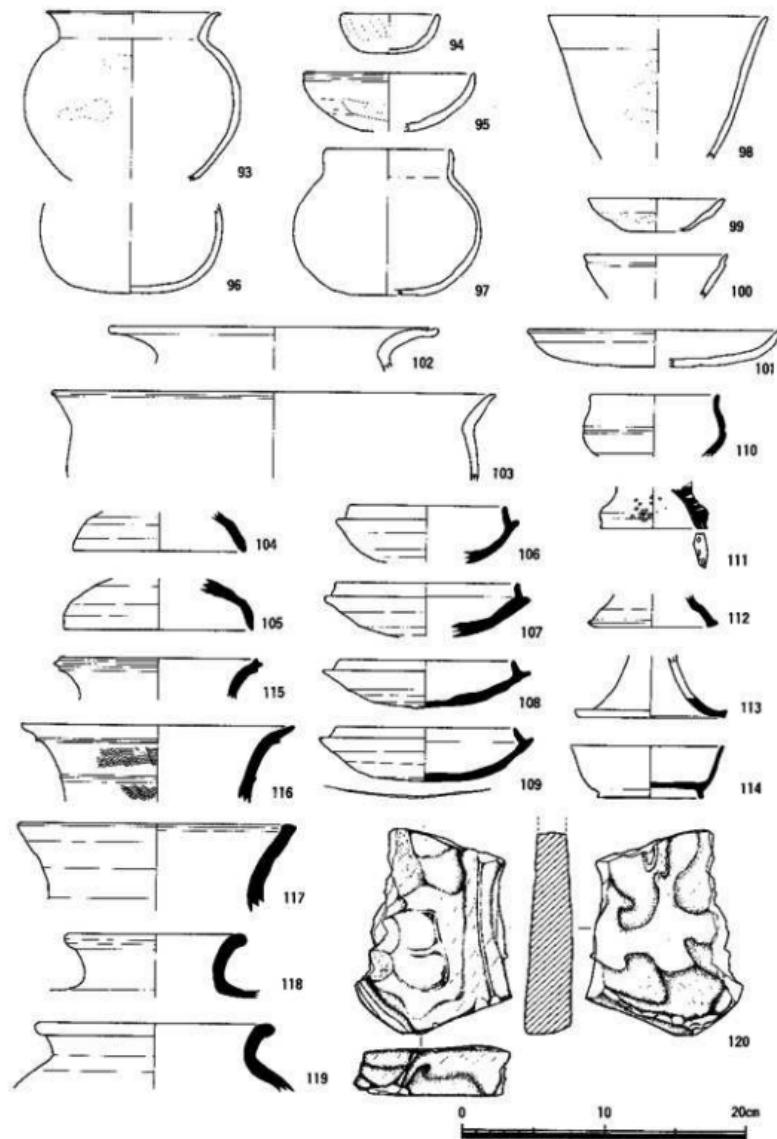
弥生時代後期の小型鉢83は第7層出土のもので、ほぼ完存しており、近隣にこの時期の生活の跡のあることを窺わせる資料である。この他にも第7層からは弥生時代後期に相当する上器片は若干出土しているが、図化できるものはない。

古墳時代前期（庄内式期）に比定されるものには、壺84・85、小型器台86、庄内壺87～92などがあるが、古墳時代後期のものに比べて出土量は少ない。

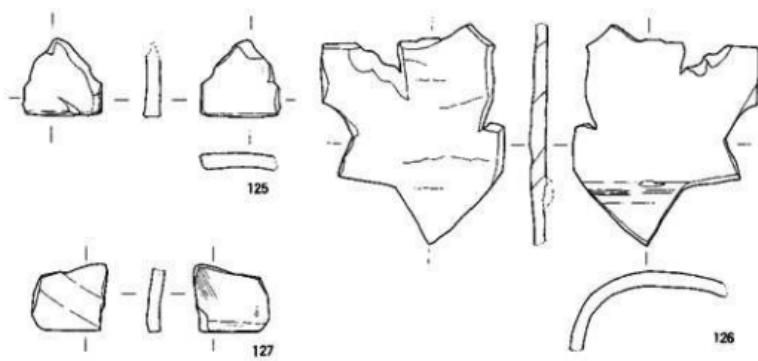
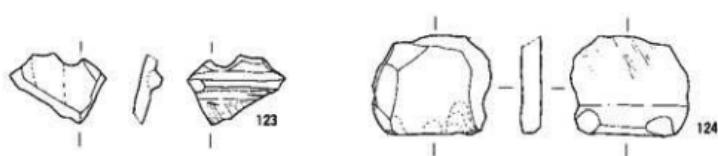
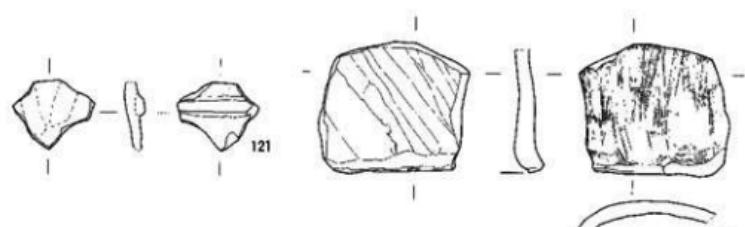
古墳時代後期のものは、土師器短頸壺93・96・97・杯94・95・98～101・壺102・103、須恵器杯蓋104・105・杯身106～110・114・高杯111～113・壺115・116・壺117～119などがある。前述の古墳時代前期の遺物とは同一の層内から出土しており、層位的に明確に分けきれるかは今後の課題である。埴輪139～144については、各遺構・河川からもほぼ均一な密度で出土しており、大きなかたよりはなかった。全体的にみればタテハケのものが多く、ヨコハケのものはまれで、時期的にはまとまりのあるものと思われる。



第10回 包含層出土遺物実測図1

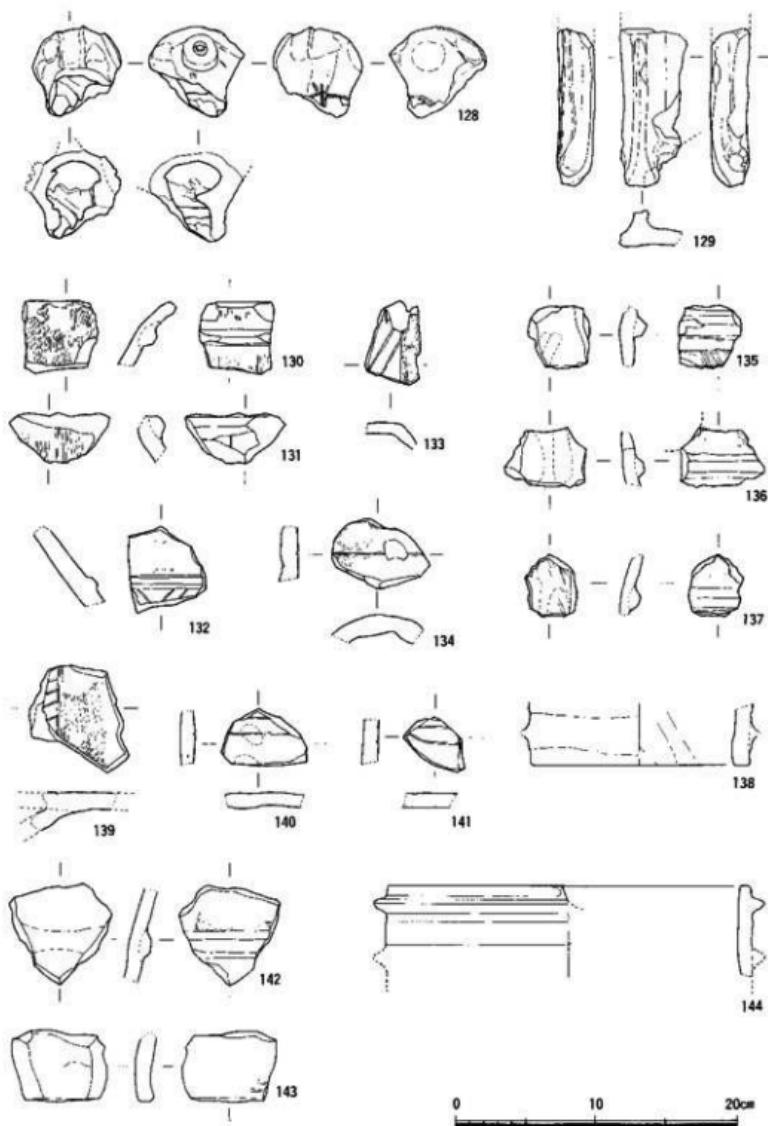


第11図 包含層出土遺物実測図2



0 10 20cm

第12図 SD-1 (121,122)、SD-3 (123,124)、包含層 (125~127) 出土埴輪実測図



第13図 NR-1 (128~138)、包含層 (139~144) 出土埴輪測定図

第3章 出土遺物観察表

SK-1

* 1cmあたり

遺物番号 四版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技術	色調	胎土	焼成	備考 保存率
1 七	土器鉢	口径 12.35 器高 6.7	半球形の体部、口縁部は内に稜を持ち、上方へ内湾する。端部は尖る。 外側体部部へラケツリ後ナダ、内側体部ナダ、口縁部ヨコナダ。	淡褐色	青一や粗 花崗岩	良好	ほぼ完存
2 七	土器鉢	口径 14.9 器高 6.05	浅めの半球形の体部、口縁部は丸く延出し、斜上方へ内湾して伸びる、端部は丸い。 1と同じ	淡褐色-黄 茶色	青	良好	劣残存 黒斑
3 七	土器鉢	口径 15.65 器高 8	半球形の体部、口縁部は内に稜を持ち、二段に凸出する、端部は尖る。 1と同じ	淡褐色	青一や粗 花崗岩	良好	ほぼ完存 黒斑
4 七	庄内裏	口径 13.8 最大径 16.5 器高 16.3	球形に近い体部、底部は平型、口縁部内面の棱は無い、端部は丸くつまみ上げられる。 外面タタキ(7条)後ハケ(9-10条)、内面ヘラケツリ、口縁部ヨコナダ。	乳褐色-茶 褐色	粗 角閃石 長石・石英	良好	上半ほぼ完存、下半残存 煤付着
5	庄内裏	口径 12	強く外反する口縁部、端部は丸くつまみ上げられる。 ヨコナダ	黑色(外側) 赤褐色(内面)	やや粗	良好	黒斑?
6	庄内裏	口径 14	「く」の字形に屈曲し、強く外反する口縁部、端部は丸くつまみ上げられる。 外面タタキ(5条)後ハケ(8条)、内面ヘラケツリ、口縁部ヨコナダ。	茶褐色	粗 角閃石 長石	良好	
7	庄内裏	口径 13.4	「く」の字形に折れ、直線的に伸びる口縁部、端部はつまみ上げぎみとなり、外に面を持つ。 ヨコナダ、内面ヘラケツリ	茶褐色	粗 角閃石 長石	良好	
8	庄内裏	口径 16.4	「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部、端部はつまみ上げられ、外張する面を持つ。 外面タタキ(5条)後ハケ(7-8条)、内面ヘラケツリ、口縁部ヨコナダ。	茶褐色	やや粗	良好	
9	庄内裏	口径 18.1	「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部、端部は丸くつまみ上げられる。 外面タタキ(6条)、内面ヘラケツリ、口縁部ヨコナダ。	茶褐色	粗	良好	

SD-1

遺物番号 四版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技術	色調	胎土	焼成	備考 保存率
10	庄内裏	口径 15.6	「く」の字形に屈曲し、直線的に伸びる口縁部、端部は外傾する丸みのある面となる。 ヨコナダ	黒褐色	やや粗	良好	煤付着?
11	庄内裏	口径 15.85	「く」の字形に屈曲し、外反ぎみに伸びる口縁部、端部は上外方に立つ。 外面タタキ(6条)、内面ヘラケツリ、口縁部ヨコナダ。	淡褐色	やや粗	良好	

II 矢作遺跡

＊＊1 単位あたり

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 遺存率
12 七	土師器 蓋	口径 14.4 最大径 23.8	球形の体部に外反する口縁部がつく。端部は丸みのある角となる。 外面ハケ(10条/1.2cm**), 内面肩の接合部にエッセンジ後ハラケグリ, 口縁部ヨコナダ。	黄褐色~淡 灰褐色	やや粗 長石・石英	良好	出発 只残存
13	土師器 蓋	口径 22.45	端部は玉縁状となり、ヘアで留取りされる。 外面ハケ(12条/2.7cm), 内面ユビオサエ? 端部ヨコナダ。	茶褐色	やや粗 長石・石英 花崗岩	良好	内面火をう けて調製不 明瞭
14 七	須恵器 蓋	口径 18.05 最大径 28.8	やや上位に最大径をもつ体部、口縁部は直立した後、斜上方へ外反する。端部は平底。 外面ハケ(11条/2.4cm)後回転カギ目(9 条), 内面両心タキナ, 口縁部ヨコナダ。	淡灰色~灰 黑色	やや粗 長石・石英	良好	底かぶり? 只残存
15 七	須恵器 杯(蓋)	口径 14.2 器高 4.4	浅い半球形の体部、後の表裏はわずか、端 部は丸く終る。 外面回転ケメリ後口縁部, 内面回転ナダ。	白灰褐色	やや粗 石英・長石 チャート	良	ほぼ完存 表皮剥離
16	須恵器 杯(良)	口径 12.8 受底部 15	短く水平に伸びる受部、立ち上がりは内側 し、端部が尖る。 外面回転ケメリ後口縁部, 内面回転ナダ。	青灰色 紫褐色(器内)	密	良好	底かぶり?
17 七	須恵器 高杯	縦径 7.55	「ハ」の字形に開き丸い棱を持つ、端部は外 へつづみ外模様の圓を持つ。3孔(径0.9cm), 杯底面削平ナダ、脚内面回転ケメリ後回転 ナダ。	青灰色	密	良好	脚部完存
18 七	須恵器 高杯	縦径 9.6	17に似る。3孔(径0.6cm)は棱の位置に掌 たれる。	青灰色	密	良好	脚部完存

SD-2

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 遺存率
19 八	土師器 小型器台	口径 9.2	浅い半球形の受部、端部は器肉を減じて立 ち上がり、側面は凹面になる。 ナダ、ヨコナダ、受部内側にヘラミガキ? 脚基部外側ヘラによる留取り、内面しづり目。	赤褐色	密 チャート 赤色酸化鉄	良好	表皮剥離
20 八	須恵器 長蓋壺	-	上方方へだらかに開く口縁部、肩部は内 に膨らむ形を持ち、水平に開く。口縁上部に2 条の凹線文。 回転ナダ	白灰色	密	良好	外面自然釉 (暗緑色) 内面灰かぶり

SD-6

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 遺存率
21	土師器 蓋	口径 11.7	体部から丸く屈する短い口縁部に至る。 端部肉を減じて丸く終る。 ナダ、ヨコナダ	赤褐色~淡 褐色	密	良好	外表面皮 剥離、口 縁端部に 焼付着
22 八	土師器 長蓋壺	最大径 12.6	やや扁平な球形の体部底盤はやや平坦、上 外方へ直線的に伸びる口縁部。 外側体部下半ハラケグリ、ナダ、内面肩に ユビオサエ。	赤褐色~黄 茶色	やや粗~密 チャート・石英・長石	良好	ほぼ完存 口縁端部の み欠損
23 八	磁石	幅 6.0 長さ 13.2 厚さ 3.1~3.55	平面の形状は橢円形を呈する、使用面は表 面、二側面の3面				

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎	土	焼成	備 遺存率
24	土師器 壺	口径 39 器高 10.8	なだらかに開く船、筒口の内面にはヒレ状の突起を持つ。 突起の場合はユビオサエ、ハケ(14条/3cm)、後板・先端部ヨコナダ。	暗赤褐色	粗 花崗岩 チャート 玉母	青	良好	
八								

SD-7

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎	土	焼成	備 遺存率
25	土師器 平底鉢	口径 13.2 器高 10.9	円錐台形の体盤に牛角状の把手が付く。LI 縫織部は外反ぎみとなり、尖って終る。 底部に木製底、ナデ、ヨコナダ、把手はヘ ラ状工具で作る。	赤褐色-黄 茶色	青		良好	残存
八								
26	土師器 杯	口径 14.2	平凸な底盤から丸みを持って伸びる、口縁 部は外に縁を持ち、立ち上がる。 外底面へラケズリ、体部ユビオサエ、ナ デ、ヨコナダ。	淡黄色	青		良好	

SD-8

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎	土	焼成	備 遺存率
27	土師器 杯	口径 14.9	26に似るが縁は純い。	淡赤褐色	青		良好	表皮剥離

SW-1

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎	土	焼成	備 遺存率
28	土師器 小舟形 杯	口径 7.65 器高 3.5	ほぼ平底形の体底部、端部は短く直立し、 丸く終る。 ヘラケズリ後ナデ、ヨコナダ。	淡赤褐色	やや粗 赤色氧化物 花崗岩・石英 長石	青	良好	完存 外表面皮 剥離
九								
29	須恵器 壺	最大径 10.4	肩に縁を持つ扁平な球形の体部。 両輪ケズリ後外面部、内面回転ナデ、内 面底部静止ナデ。	青灰色	青 長石・石英	青	良好	底かぶり 残存
九								
30	須恵器 壺	最大径 16.35	扁平な球形の体部、颈部接合部で欠損。 両輪ケズリカキサ(23条/3cm)、腹部、内面 回転ナデ。	淡青灰色-灰 白色	青	青	良好	底かぶり
31	須恵器 杯	口径 11.2	半球形の体部、縁は凹縁状の浅い凹みとな る。口縁縫結は先端となり尖る。 回転ヘラケズリ後回転ナデ、天井部内面回 転ナデ。	淡青灰色(外) 灰白色(内)	青	青	良好	
32	須恵器 杯	口径 12.4 器高 4.1	31に似るが、丸みのある縁を有する。大井 部にヘラ先による「×」印。 回転ヘラケズリ後回転ナデ、天井部内面静止ナ デ。	青灰色	青	青	良好	
九								
33	須恵器 杯	口径 15.2	31-32より扁平な球形、縁は純く、浅い凹 縁状の凹みを持つ。 回転ナデ	淡青灰色	青	青	良好	
34	須恵器 高杯	口径 14.6	基部からなだらかに伸び、底部付近で水平 近くに開く。腹部は上下に拡張し、面を持つ。 方舟の造しし四線又2条下部方形造しし ぱり口、回転ナデ、杯底部内面静止ナデ。	淡青灰色	青	青	良好	破部残存
九								

遺物番号 回取番号	器種	(cm) 口径 法善 器高	成形・構造・技法	色調	胎土	焼成	備考 遺存率
35	須惠器 器台	-	受部底部のみ唐草。 外向平行タタキの後回転カキ目、脚部直柱ナダ、内面同心円タタキの後上方を回転ナダ。	淡青灰色	青	良好	
36	土師器 羽釜	口径 28.3	鍋は中ほどで下がりぎみとなる。 ヨコナダ、内面全体ナダ?	茶褐色	粗 花崗岩、角 閃石、長石 右美	良好	表皮剥離

N.R.

遺物番号 回取番号	器種	(cm) 口径 法善 器高	成形・構造・技法	色調	胎土	焼成	備考 遺存率
38	須土器(口) 壺	LJ径 24.2	外反する口縁部、端部は下方に肥厚し、内 傾する面となる。上端に向形浮文を貼付、側 面に彫模き豪文(10条/1.2cm)を施す。 ヨコナダ	淡青褐色(外) 淡茶褐色(内)	粗 長石、角閃石	良好	
39	須土器(口) 壺	口径 14.55	立ぎみの細い圓錐、口縁部は外反し、端 部はつまみ上げぎみとなる。 外周段ハケ(1条/1.6cm)後ヨコナダ、内面 肩にヨコナダ、口端部斜面ハケ(1条/1.6cm) 後端部ヨコナダ。	茶褐色	粗 花崗岩、角 閃石、長石	良好	
40	土師器 壺	口径 12.8	上外方へ直線的に伸びた後わずかに外反す る端部に型る。 外囲ハケ後ヨコナダ、内面肩部ヘラケズ リ、ハケ後ナダ、端部ヨコナダ。	赤橙色(外 -内上半) 灰黑色(内 下-唇肉)	やや粗 -粗	良好	赤色顔料 敷布?
41	土師器 二重口縁 壺	-	水平近く伸びて後傾曲し、さらに外反して 伸びる口縁部、端部欠損。粗部下端に刻み 目+凹線文、上端に彫模き豪文(7条 /1.2cm)十竹等押印円形浮文、外周ヨコナ ダ、内面ヨコナダ。	乳白色 器内は 灰黑色	青 石英	良好	
42	土師器 壺	LJ径 19.6	斜上方へ直線的に伸びる口縁部、端部は外 傾する面となり、凹線の凹みが窓る。 外周ヨコナダ、内面肩部ヘラケズリ、口縁 部ヨコナダ。	乳白色- 灰黑色	粗 石英、赤色酸化鉄	良好	黒斑?
-○							
43	土師器 壺	底径 5	体部から突出しない平底。 外周ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	乳白色- 黑色	粗 石英、赤色酸化鉄	良好	黒斑
44	出内壺	口径 11.9	丸みのある「く」の字形に彫曲する口縁部、 端部は直立する側面を持つ。 外周ヨコナダ、内面肩部ヘラケズリ、口縁 部ヨコナダ。	茶褐色	やや粗 長石、石英	良好	属付器
45	出内壺	口径 14.4	「く」の字形に彫曲する口縁部、端部はつま みあげぎみとなり、丸みのある面を持つ。 外周体部タタキ(6条/2cm)、口縁部ヨコ ナダ、内面体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナ ダ。	茶褐色	粗 角閃石、赤色酸化鉄	良好	
46	庄内壺	底径 2.5	体部から突出しない平底。 外周タタキ(2.5cm)後底部側縁ヘラケズ リ、内面ナダ。	黑褐色(外 -器肉) 淡茶色(内)	やや粗 長石、赤色酸化鉄	良好	黒斑?
-○	布留系 壺	口径 13.8 最大径 17.7	やや上方に最大径を有する体部から「く」の字 形に彫曲する口縁部、端部はつまみ上げる。 外周ハケ(16条/2cm)後肩部-口縁部ヨコ ナダ、内面体部ケズリ後肩部-口縁部ハケ (13条/1.8cm)	灰褐色	青-やや粗 長石、石英	良好	属付器 下半表皮剝 離 劣残存

遺物番号 四版番号	器種	(cm) 口径 器高	成形・調製技法	色調	胎	土	焼成	備考
48 —○	土師器 小鉢	口径 12.3 器高 6.4	半球形の体部、外上方へ内湾して立つ口縁部。端部は尖りざみに丸く終る。 外面ユビオサエ、ヘラケズリ後上半をナデ、内面全体ナデ、口縁部ヨコナデ。	黄褐色	密	良好	ほぼ完存	
49	土師器 高杯	口径 19.6	ほぼ水平な杯底部から斜上方へ伸びる口縁部。端部は尖る。 縁部周囲のヨコナデが不明。	橙黄色	密 赤色酸化粒	良	表皮剥離	
50	弥生? 高杯	—	直立ぎみの柱状部から角度を変えて縦部に至る。円孔を4方に穿つ(3孔残存)。杯底部は凹む。 外面ハケ・ヘラによる面取り、内面しづり目。	乳白色	粗 花崗岩・長石・石英	良好		
51	土師器? 高杯	—	調節部からなだらかに開き、縦部へ移行する。杯底部は平坦。 外面ヘラによる面取り、ナデ、内面しづり目。	淡橙色～ 黄褐色	密～精良 花崗岩 石英	良好		
52 —○	石棒?	上端5.5～3.5 下端 5.2～3.5 最大径10.4	円錐台形を呈する。下端周囲は細かい削れ、上端、下端からそれぞれ4付近に縦ずれ状の痕跡あり。					
53	土師器 甕	口径 11	体部から屈曲し、内湾ざみに立つ口縁部。縁部は内にねじかれて鋸歯状となる。 外面ヨコナデ、内面ヨコナデ。	赤褐色(外) 橙赤色(内)	密～やや粗	良好	外沿体部 表皮剥離	
54 —	土師器 杯	口径 15.15 器高 3.1	浅い半球形を呈する。口縁部は丸く終る。内外面にヘラによる「X」印。 外面底部ユビオサエ・ヘラケズリ後ナデ、内面ヨコナデ、内面底盤ナデ。	橙赤色～ 灰黑色	密～精良	良好	ほぼ完存 赤色顔料?	
55	土師器 杯	口径 13 器高 3.4	浅めの半球形。やや深い部分を呈する。端部は直立ぎみとなり、丸く終る。 54と同じ、外面ヨコナデは3段。	茶褐色～ 灰黑色	やや粗 長石・花崗岩	良好	少残存	
56	土師器 杯	口径 13.9 器高 3.3	平底な底部から丸みを持って立ち上がる、端部に沈板が巡る。 54と同じ。	橙赤色～ 灰黑色・黒灰色 (外底面)	やや粗 チャート 長石・石英	良	少残存 黒斑? 赤色顔料?	
57 —	土師器 杯	口径 15.2 器高 2.45	56に似るが浅い器形。端部は外へつまみ出され、突き込むように丸く終る。 56と同じ。	黄褐色～ 灰黑色	密～やや粗 石英・長石	良	少残存 黒斑?	
58	土師器 杯	口径 15	底部から丸く立ち上がり、直線的に伸びる口縁部。端部は丸く終る。 外面底部ヘラケズリ、他はヨコナデ、内面に刷文状ヘラミガキ(4.5条)	淡橙色	精良	良好	底部の破片あり	
59 —	土師器 杯	口径 11.05 器高 3.4	底部から丸く立ち上がり、直線的に長く伸びる。端部は丸く終る。 スピオサエナデ、外側底部のみナデ、口縁部ヨコナデ、内面全体ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡橙色～ 灰黑色	精良	良好	ほぼ完存 黒斑	
60	土師器 杯	口径 13.8	直線的に伸びる体部。著しく内湾して立つ口縁部、端部丸く終る。 口縁部ヨコナデ。	灰黄色	精良～密 石英・長石	良好		
61 —	土師器 杯	口径 16.4	60に似る。 58に似る。	淡橙色	密～やや粗 長石・石英	良好		

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口徑 法蓋 器高	成形・調整技術	色調	胎土	焼成	備考 遺存率
62	土師器 杯	高台径 6.3 高台高 0.65	底部内面中央突出する、高台は断面台形、下端は水平。 外腹底部ヘラケズリ後高台周辺コナデ、内面ナデ。	赤褐色(外) 灰黄色(内)	精良～密	良好	
63	土師器 高杯	口径 8.7	外下方へ内湾さみに伸びる、腹部は未調整。 外面ナデ、内面3段のユビオサエ。	灰褐色～ 黒灰色	精良～密 長石	良好	出現
64	土師器 壺	口径 38.4	外面底部に棱を持ち、斜上方へ外反する口 縁部、端部は下につまれ、四面となる。 内外外部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコ ナデ。	赤褐色～ 茶褐色	精良 長石・赤色酸化鉄	良好	保付箋
65	須恵器 高杯	-	「フ」の字形の脚、内削して聞く部位に丸み のある腰を持つ。円孔(径0.8cm)を3方に穿 つ。 回転ナデ、外底部滑止ナデ。	淡青灰褐色	密 長石	良好	
66	須恵器 高杯	口径 10.8	台形の脚、内に棱を持ち、内削して聞く部位 部、端部は沈板が風る凹をなす。 回転ナデ。	灰褐色(外) 淡青灰褐色(内)	密	良好	灰かぶり？
67	須恵器 高杯	-	筒形の脚、外沿に2条の凹縦がある。長方 形の浅し(幅0.5cm)を3方に穿つ。 底部内面静止ナデ、外腹回転ナデ、内面 しづり目。	淡青灰褐色～ 黒灰色	密	良好	灰かぶり
68	須恵器 杯	口径 12.65 器高 3.6	平頭な底部からわざかに立ち上った後、 上方へ伸びる。底部は丸く抉る。 外腹底部ヘラケズリ後全体を回転ナデ。	白灰褐色	密～やや粗 石英・チャート・ 長石	良好	表皮剥離 ほぼ完存
69	須恵器 杯？	-	68に似るが丸みのある器形。 外腹底部ヘラケズリ後全体を回転ナデ。	灰白色	密 石英・長石	良好	
70	須恵器 壺	-	直立する脚部、直線的に下る肩から棱を持 ち、丸みを持って下る体部。 外腹肩以下回転ケズリ後全体を回転ナデ。	灰白色	密～やや粗 長石	良好	
71	須恵器 長颈壺	-	直線的に下る肩から長い棱を持ち、直線的 に下る。棱以下に凹曲形十櫛模列点穴(4条 /1.2cm)が並ぶ。 70と同じ	淡青灰褐色～ 黒灰色	密～やや粗	良好	灰かぶり
72	須恵器 長颈壺	高台径11.1 高台高 0.7	直線的に下る体底部、高台は「ハ」の字形に 開き、腰部は太平な面となる。 回転ケズリ後回転ナデ。	淡灰褐色	精良～密	良好	透明緑色 の自然釉
73	須恵器 杯？	高台径 8.5 高台高 0.55	高台は断面台形で「ハ」の字形につく。腰部 は四面となる。体部へ丸みを持って鋸く。 外腹ヘラケズリ後回転ナデ、内底底部滑止 ナデ。	白灰褐色	精良	良好	
74	須恵器 壺	高台径 7.75 高台高 0.7	直線的に伸びる体部、高台との境界には凹 縦状に凹む。高台は断面台形で「ハ」の字形に 付き、腰部外側する面となる。 外腹ヘラケズリ後全体を回転ナデ。	灰色(外) 灰白色(内)	精良	良好	
75	須恵器 壺	高台径 8.6 高台高 0.9	高台の接合部から丸く崩曲した後、直線的 に伸びる体部、高台は「ハ」の字形に開き、腰 部は外側する四面となる。 74と同じ	灰色(外) 紫褐色(内・器内)	精良	良好	緑灰色の 自然釉

遺物番号 団版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 遺存半
76	瓶底器 小型壺	底大径 6 底径 3.6	平坦な底部から一旦立ち、上位部に最大径を持つ体感、長い枝を持ち河へ至る。 外面部底面回転余切り、体部回転ケズリ後回転ナダ。	黒灰色～灰白色	精良	良好	ほぼ完存 表皮剥離
—	瓶底器 壺・	口径 7.7	上方へ直線的にのびる口縁部、端部近くで内湾ぎみとなり、端部丸く終る。 回転ナダ	灰色(外) 灰黑色(内)	精良	良好	灰かぶり?
78	瓶底器 短颈壺	口径 11.8	肩から丸く屈曲し、上方へ伸びる。口縁部は玉綱状となり、内湾し、端部つまみ上げる。 内面部肩部に同心円タキ、全体を回転ナダ。	灰白色	密 長石	良好	
79	瓶底器 壺	口径 19.2	肩から丸みを持ち、上方へ伸びる口縁部。 端部は丸い突起状で、上方に丸みのある面をもつ。 回転ナダ	白灰色	精良	良好	
80	瓶底器 壺	口径 26.6	肩から一歩立ち上がり、斜上方へ外反する 口縁部、端部は半球状に丸く終る。 外面部体部平行タキ(11条/1.9cm)後回転カム(5~6条)内面部体部同心内タキ、口縁部回転ナダ。	青灰色	密	良好	灰かぶり
—	瓶底器 器台	口径 28.2	口縁部は外反し、端部は外下に折り返され、側面は平坦面となる。 外面部回転カキ目(9条)、口縁部・内面部回転ナダ。	青灰色	密	良好	
82	馬具上製品 上馬	残存長10.5 残存高8.75	手づくね。 ペラによる開取り後エビナナ仕上げ。	赤茶色	精良	良好	固頭駄一頭部・右後肢 欠損
—○							

包含層

遺物番号 出土場所 団版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考 遺存半
E —	京セト着付 小型鉢	口径 13 底径 3.5 器高 5.95	円錐形を呈する、底部は突出する。注口を有する。 外面部本に本素庄底、底部回転ハラで削とり? 内面部底部にハケ状T具痕、全體ナダ。	淡青褐色 ～黒色	密～やや粗 長石・石英 雲母	良好	黒斑あり 外面に擦痕 完存
B	土師器 壺	口径 15.4	斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部。端部は器内を減じて外輪面となる。 ヨコナダ	淡黄色～ 灰白色	やや粗 長石・石英	良好	黒斑
A	土師器 二重口縁 壺	口径 17.7	直立する壺部から外上方へ開き、屈曲した 外反ぎみに立ち上がる。端部丸く終る。 ヨコナダ	淡黄色～ 灰黑色	やや粗 長石・石英	良好	黒斑?
E	土師器 小型器台	口径 8.9	外上方へ直線的に伸びる受部。端部は丸く上方へつまみ上げられる。 ヨコナダ	淡黄色(外) 淡褐色(内)	精良	良好	
A	土師器 庄内壺	口径 11.3	内に丸みのある腹を持ち、「く」の字形に伸びる口縁部。端部ははね腰ぎみとなりつまみ上げる。 外面部タキ後ハラ? 内面部ハラケズリ、口縁部ヨコナダ	茶褐色(外) 灰褐色(内)	粗 長石・石英・角閃石	良好	煤付着
C	庄内壺	口径 10.8	「く」の字形に直線的に伸びる口縁部。端部ははね腰ぎみとなり上方へつまみ上げられる。 外面部タキ、内面部ハラケズリ、口縁部ヨコナダ	茶褐色	粗 角閃石・長石・石英	良好	煤付着
B	庄内壺	口径 13.2	「く」の字形に直線的に伸びる口縁部。端部は丸くつまみ上げられる。 ヨコナダ	茶褐色	やや粗 長石・角閃石	良好	

遺物番号 出土場所 回収番号	器種	(cm) 口径 法算 器高	成形・開鑿技法	色調	施土	焼成	備考
90 C	庄内型	口径 13.4	丸みのある「く」の字形に外反する口縁部、端部は上方へつまれ、丸みのある面となる。外側タタキ? 内面ハラケズリ、口縁部ヨコナダ。	茶褐色	やや粗 長石・角閃石	良好	煤付着
91 D	庄内型	口径 13.4	「く」の字形に強く外反する口縁部、端部は著しくつまれ、面を持つ。外側タタキ(6条)、内面ハラケズリ、口縁部ヨコナダ。	黒褐色(外) 茶褐色(内)	粗 花崗岩・長石・角閃石	良好	
92 A・C -二	庄内型	口径 18.65	91に似る。 外側タタキ(6条)後ハケ(8~9条)、内面ハラケズリ、口縁部ヨコナダ。	淡茶色	粗 花崗岩・長石・石英・赤色酸化鉄	良好	
93 A・C -二	土師器 甕	口径 12 最大径 15.2	球形の体部、内に腰を持ち上方へ外反する口縁部、端部は外へ突いて終る。 外側部ユビオサエ後ハラケズリ後ナダ、内面下半ハラケズリ?後ナダ、口縁部ヨコナダ	淡茶褐色 -淡青色	やや粗 チャート・石英・長石	良好	汚染存
94 C -二	土師器 小型杯	口径 6.7 最大径 2.8	ほぼ半球形、底部はわずかに平坦。口縁部はふぞろいなまま終る。 ユビオサエ、ハラケズリ後ナダ。	乳黃色(外) 淡青色(内)	密 石英	良好	汚染存
95 A	土師器 杯	口径 12	半球形の体部、平坦な底部、端部は直立ぎみとなり、外へつまれる。 97と同様	黄褐色(外) 橙色(内)	精良 赤色酸化鉄	良好	
96 D	土師器 甕	最大径 12.95	93に似る。 ハラケズリ、ナダ。	褐色~乳 黄色	密 石英・チャート	良好	表皮剥離
97 D -二	土師器 短颈甕	口径 8.9 器高 10.4	平坦な底部、球形の体部、内湾ぎみに直立する口縁部、端部は丸く終る。 外側底部ハラケズリ、内外口縁部ヨコナダ、内面柄にユビオサエ?	赤褐色~黑 褐色(外) 乳白色~黑 褐色(内)	密 チャート・赤色酸化鉄	良好	一次加熱の ためか表皮 剥離 汚染存
98 C	土師器 平底甕	口径 15.5	内湾ぎみに伸びた後直線的に伸びる口縁部、端部は外反ぎみにのび、尖りぎみに丸く終る。 ユビオサエ後ナダ、口縁部ヨコナダ。	淡褐色(外) 乳白色(内)	密~やや粗 石英・長石・赤色 酸化鉄	良好	内面表皮 剥離
99 E	土師器 杯	口径 9.6	直線的に伸びる体部、外に腰を持ち角度を変えて伸びる口縁部、端部は丸く終る。 外側ユビオサエ後口縁部ヨコナダ、内面体部ナダ口縁部ヨコナダ。	淡褐色	密~やや粗 石英・チャート	良好	
100 E	土師器 杯	口径 10.1	99に似るが深い臺形。 99と同様。	乳黄色	精良~密	良好	
101 C	土師器 杯	口径 17.9 器高 2.6	平坦な底部、口縁部は外反ぎみで、端部丸く終る。内面に暗文刻ヒミガキ? 外側底部ハラケズリ後ナダ、口縁部ヨコナダ、内面ナダ、ヨコナダ。	黄茶色	精良	良好	
102 A	土師器 甕?	口径 23	内に腰を持ち、水平近くに外反して伸びる口縁部、端部は上方へ丸くつまれる。 ヨコナダ。内面肩部にハラケズリ?	黄褐色	密~やや粗 石英・長石	良好	
103 D	土師器 甕	口径 31.3	直立ぎみの体部、斜上方へ直線的に伸びる口縁部、端部は外へつまれる。 内外体部ナダ。口縁部ヨコナダ。	淡黄色	密	良好	

遺物番号 出土地区 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形・調整技法	色 病	胎 土	燒成	備 考 存 率
104 D	須恵器 杯蓋	口径 11.1 法量 12.1	半球形を呈する。端部丸く終る。 回転ナダ。	淡灰色 青 長石		良好	
105 D	須恵器 杯蓋	口径 13.3	無い櫛が残り、口縁部は直線的に下る。端部尖りぎみに終る。 外周回転ケズリ後回転ナダ。	淡青灰色 紫灰色 (器肉)	青	良好	
106 B 一二	須恵器 杯身	口径 11 受部径 13	半球形の底盤。上外方へ伸びる短い受部。 立ち上がりは内傾し、端部丸く終る。 回転ケズリ後回転ナダ。	淡灰色	精良-青	良好	
107 C	須恵器 杯身	口径 13 受部径 14.6 器高 3.35	直線的に伸びる底部。水平に伸びる短い受部。 立ち上がりは内傾し、端部外に張る。 回転ケズリ後回転ナダ、内側底部停止ナダ。	灰黒色(外) 青灰色(内)	青	良好	灰かぶり 器内きわめて厚い
108 E	須恵器 杯身	口径 12.3 受部径 14.8 器高 3.35	107に似るが薄手で扁平。 回転ケズリ後回転ナダ、内側底部停止ナダ。	青灰色	青 花崗岩・長石	良好	
109 D 一二	須恵器 杯身	口径 12.7 受部径 15.2 器高 3.9	丸みのある底部から上外方へ突出する短い受部。 立ち上がりは内傾し端部消失する。 回転ケズリ後回転ナダ、内側底部停止ナダ 外周底部にヘラによる直線文	灰白色	青	良好	ほぼ完存
110 A 一三	須恵器 短壺?	口径 9.05 最大径 10.2	扁平な球形の底部に1条の内縫を施したせん。 後度立する口縁部に生る、端部は丸く終る。 回転ナダ	灰白色	青	良好	
111 B 一三	須恵器 高杯?	口径 7.4	内溝ざみに伸びる脚窪部。内面は欠損。 外面・瓶底間に外側から無数の刺突文(径 0.15-0.6cm) 外周ナダ?	青灰色	青	良好	
112 B	須恵器 高杯?	胎径 8.2	内溝して聞く脚窪部、端部は外傾する型。 回転ナダ。	灰白色	青	良好	
113 D	須恵器 高杯	胎径 10.5	外反して伸びる脚窪部、端部は下方に拡張し、外傾する面となる。長方形の連じ(3 方?)を有する。 回転ナダ。	青青灰色	青	良好	
114 A 一三	須恵器 杯	口径 10.75 器高 3.7 高台高 0.5 高台径 7.5	平坦な底部から丸く脚窓し、外反ざみに伸びる口縁部、高台は「ハ」の字形に聞く。 外周底部回転ケズリ後回転ナダ、高台は貼り付け?	青灰色	精良	良好	
115 B	須恵器 壺	口径 13.9	外反する口縁部、端部は上下に拡張し、突起が高まる。 回転ナダ。	青灰色	青	良好	灰かぶり
116 B 一三	須恵器 壺	口径 19.3	外彎した後外反する口縁部。端部は尖りぎみに終る。外面に突唇+横搖波状文(8条 /1.3cm)2箇以上。 回転ナダ。	黒灰色(外) 灰色(内)	精良	良好	灰かぶり(外) 緑黄色の自然釉(内)
117 B	須恵器 壺	口径 19.2	直立した後上外方へ内溝ざみに伸びる口縁部、端部は内につままれ、水平な面となる。 回転ナダ。	白灰色 青灰色 (器肉)	青 長石	良好	灰かぶり?

II 矢作遺跡

遺物番号 出土地区 回収番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形 調整 技法	色調	胎	土	焼成	備考 遺存率
118 D 一三	須恵器 甕	口径 12.1	水平に伸びる肩から丸く外反する口縁部、 端部は玉縁状に丸く終る。 外縁に平行タキの痕跡、口縁部ヨコナデ、 内面肩に同心円タキ、口縁部ヨコナデ。	白灰色～ 灰黑色	精良		良好	表皮剥離
119 B	須恵器 甕	口径 16.2	なだらかな肩から丸く弧曲し、上方へ直線的に伸びる口縁部、端部は玉縁状。 ヨコナデ、肩部に凹縫カキ目？	青灰色	青 石英・長石		良好	
120 A 一三	灰石？	幅8.1～11.0 長33.0～14.6 厚8.0～3.2	平面の形状は五角形を呈する。表面・裏面・二側面の四面に使用痕が認められる。					焼付着

SD-1

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形 調整 技法	色調	胎	土	焼成	備考 遺存率
121	円筒埴輪		タガの断面は低い台形。 外面左よりハケ(7条)、タガの接合はヨコナデ、内から指おさえ。	橙茶色 乳茶色 (器肉)	やや粗 長石・石英・ 花崗岩		良好	
122	円筒埴輪		横断面は楕円形を呈する、右は外反ぎみで 内に折り返される。 外縁ハケ(11条)、施ヨコナデ、内面左上 がりユビナデ。	乳黄色 白灰色 (器肉)	やや粗 石英		良好	

SD-3

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形 調整 技法	色調	胎	土	焼成	備考 遺存率
123	円筒埴輪		タガの断面は台形。 外面左上がりハケ(7～8条)、タガの接合 はヨコナデ、内から指ねさえ。	乳黄色	密		良好	
124	円筒埴輪		外面左上がりハケ(不明瞭)施ヨコナデ、内 面指ねさえ。右に指頭状痕遺存。	橙茶色	密		良	

包含層

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形 調整 技法	色調	胎	土	焼成	備考 遺存率
125 B	形象埴輪？		直角近くの二辺連存、やや内凹する波片 ハケの後ナデ、端辺は特に丁寧にナデる。	乳茶色 灰色(器肉)	密		良好	外面に赤色 顔料塗布
126 B	円筒埴輪		外面左上がりハケ(不明瞭)施ヨコナデ、内 面ユビナデ	橙茶色	密		良好	
127 B	円筒埴輪		横断面は楕円形を呈する。タガは接合部か ら欠損(波状の凹みあり)。 マキ上げ、ハケ調整の後ナデ仕上げ。	橙茶色 灰色(器肉)	密		良好	

N R - I

遺物番号 出上地区 四段番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形 調整 技法	色調	胎 土	焼成	備 考 存 率
128	扇形埴輪		トサカ・クチバシ等は接合部から欠損。左日のみ残存。首にはヘラによる沈線あり。マキ上げ、ハケ調整の後ナダ仕上げ。	乳黄色 白灰色 (器内)	密	良好	
129	家形埴輪?		凸筋状の部分が遺存する。部位は不明。凸帯下端の一方には切り込みあり。	乳黄色	密	良好	凸筋下端に 黒斑あり
130	御扇形埴輪		タガの断面は低い台形。 内外タテハケ(7条)後ヨコナデ、内から指おさえ、端部ヨコナデ。	褐系色 灰色(器内)	密	良好 硬質	
131	倒扇形埴輪		タガの断面は丸みのある台形。 外面部ヨコナデ、内面部タテハケ(11条/1.8cm) 後ユビナデ。	灰黄色 器内(灰色)	やや粗	良好	
132	帆扇形 埴輪?		タガの断面はさわめて低い台形。 外面部タテハケ? 内面部指捺压痕残る。タガの下部にヘラ括き沈文。 蓋形埴輪の可能性もあり。	乳白色	密	直	表皮剥離
133	垂形埴輪?		後を持ちくの字形に折れる。 外面部ハケ(7条)後一面をナダ仕上げ後ヘラ 括き沈文、内面部	乳白色~ 乳橙色	密	良好	
134	毛象埴輪?		復元径は10cm前後と小型。 外面部ハケ(10条)、方向を逆にして羽羽根状に施す。ヘラ括き沈線、内面部指おさえ。	乳褐色	密	良好	
135	円筒埴輪		タガの断面は高めの台形。 外面部左上がりハケ(8条)、タガの接合は強 いヨコナデ、内から指おさえ。 円孔遺存する。	黄茶色	密	良好	
136	円筒埴輪		タガの断面は低めの台形。 外面部左上がりハケ(9条)、タガの接合はヨ コナデ、内から指おさえ。	黄茶色	密	良好	
137	円筒埴輪		タガの断面は丸みをおびた台形。外面部左上 がりハケ(4条/1cm)後ヨコハケ(7条)、タ ガの接合はヨコナデ、内面部左上がりハケ(4 条)後指おさえ。	乳黄色	密	良好 硬質	
138	円筒埴輪	直径 15.4	タガの断面は三角形に近いナゲつけタガ。 外面部表面部丁寧なヨコナデ、内面部ユビナ デ。	乳黄色 白灰色 (器内)	密	良好 硬質	

包含層

遺物番号 出上地区 四段番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	成形 調整 技法	色調	胎 土	焼成	備 考 存 率
139 D	扇形埴輪?		円筒部わずかに残存。 外面部中央寄りに縦ハケ(7条)、外面部にヘ ラ括き沈線。内面部接合部付近指おさえ、ナ ゲ。	乳褐色 白灰色 (器内)	やや粗	良好	
140 D	?		ほぼ平底な埴輪片。外面部ヘラ括き沈線。 内外とも指捺压痕残る。	乳白色	密	良好	

遺物番号 古墳層 区分番号	器種	(cm) 口径 基部 高さ	成形 調整 技法	色 調	胎 土	焼 成	信 頼 度 率
141 C	?		140に低る。外面にヘラ焼き沈線。 ナダ?	乳白色 白灰色 (胎内)	密	良好	
142 E	円筒埴輪		タガは低めの台形。 外縁ヨコハケ(7条)、タガの接合はヨコナ ダ。内から折おさえ。	赤茶色	やや粗	良好	表皮剥離
143 E	円筒埴輪		胎端部近くで外反ぎみになる。外面ヨコハ ケ(7条)、内面ナダ。	赤茶色	やや粗	良好	表皮剥離
144 E	円筒埴輪	復元径25.6	2段目のタガは接合部から欠損、タガの断 面は丸みのある三角形。上端に切り込みあり。 タガの接合はヨコナダ、内面ヨコハケ(7 ~8条)、端部ヨコナダ。	乳白色	密	良好	内外に赤色 銀粉

第4章まとめ

当遺跡では、これまでの調査で、古墳時代後期の居住地（①地点）や平安時代後期から鎌倉時代の居住地（②地点）などが検出されていることから、これらの広がりを追求することが今回の調査目的の一つであったといえる。今回の調査の結果、古墳時代前期（庄内期）・古墳時代後期・奈良時代の遺構が検出されたほか、遺構に伴わない弥生時代後期の土器や、埴輪や鉄刀などが出土している。これらの調査結果を、これまでの調査結果を対比させると以下のようになる。

○弥生時代後期～古墳時代前期

①・②で溝、⑤で小穴が検出されている程度で散発的な状況である。当遺跡の東に近接する小阪合遺跡や中田遺跡がこの時期に発展する集落遺跡であることから、今回の調査地周辺は、その集落の縁辺部にあたるものと思われる。一方、下層調査で確認した河川跡は、弥生時代後期までに埋没したもので、当遺跡の東部にあたる②・⑤～⑦でも確認されているほか、小阪合遺跡・中田遺跡の西部でも確認されている。このことから、当遺跡の東部から小阪合遺跡・中田遺跡の西部にかけて、弥生時代後期以前の河川が存在したものと考えられる。

註 (財)八尾市文化財調査研究会 「小阪合遺跡 昭和57年度第1次調査報告書」：(財)八尾市文化

財調査研究会報告10 1987. 3

同上 「小阪合遺跡 昭和58年度第2次調査・第3次調査報告書」：同上報告11 1987. 3

同上 「小阪合遺跡 昭和59年度第4次調査報告書」：同上報告15 1988. 3

中田遺跡調査センター 「中田遺跡」：中田遺跡報告1 1974

八尾市教育委員会 「中田遺跡」：同上報告II 1975

○古墳時代後期

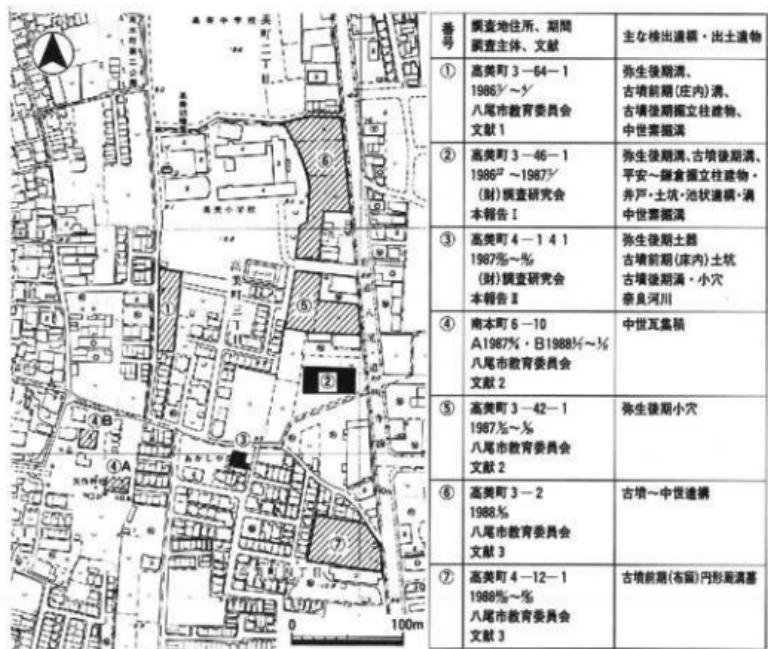
当調査地では溝・小穴があり、居住地と積極的に言える資料には乏しい。逆に、埴輪の出土や鉄刀を含む遺物の集積などから、ごく近隣に古墳の存在が想定でき、墓域の可能性が考えられる。

○奈良時代

河川を検出しただけであるが、当遺跡では初の検出例である。近隣の中田遺跡・小阪合遺跡などでは集落が検出されていることから、その広がりを知るうえで重要であろう。

○平安時代以降

当調査地では、②の居住地に対応する耕地であったと考えられ、土地利用が近年まで踏襲されていたものと思われる。



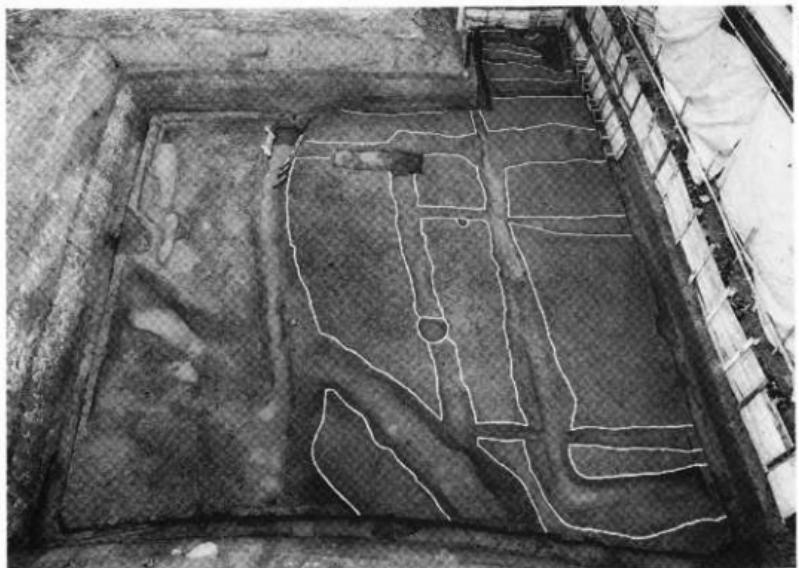
文版1 八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和61年度免査調査報告書II」：八尾市文化財調査報告

16 1987. 3

文版2 同上「八尾市内遺跡昭和62年度免査調査報告書I」：同上報告17 1988. 3

文版3 同上「八尾市内遺跡昭和63年度免査調査報告書I」：同上報告19 1989. 3

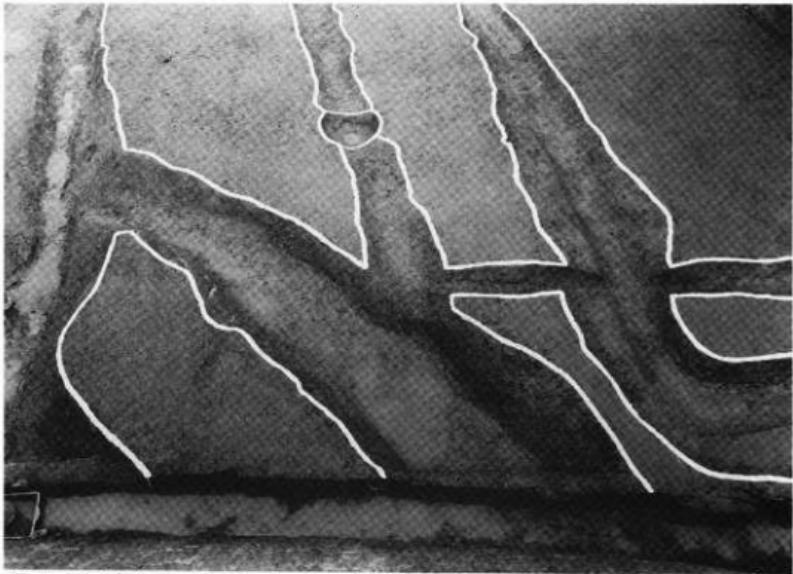
図 版



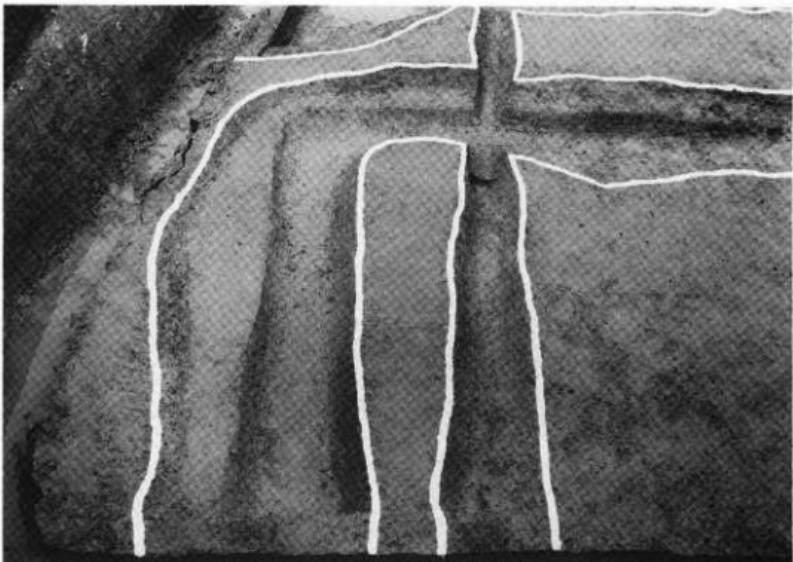
調査区全景(西から)



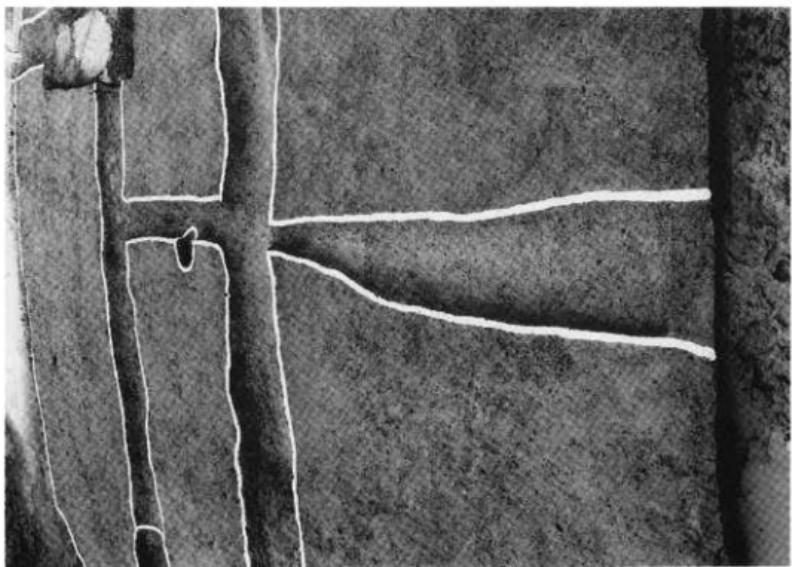
SD-7-SD-8(東から)



SD-1～SD-4（西から）

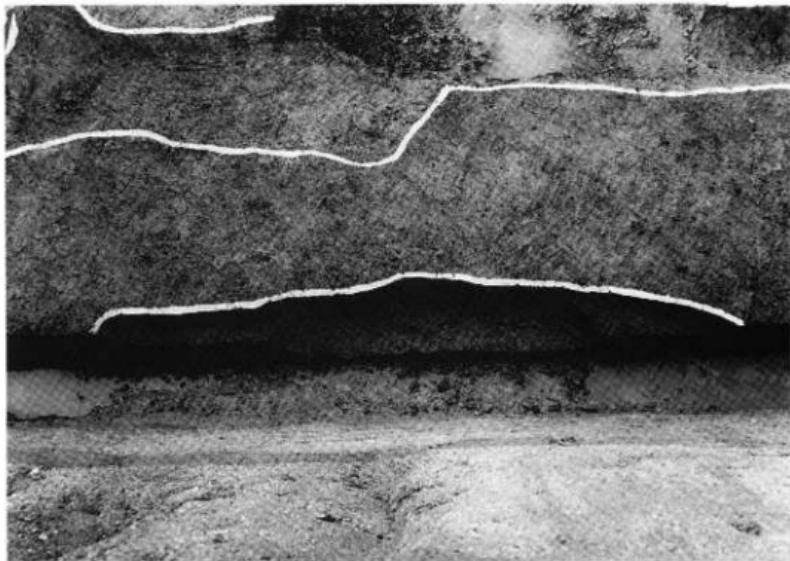


SD-3・SD-4（南から）





SK-1上層遺物検出状況(東から)



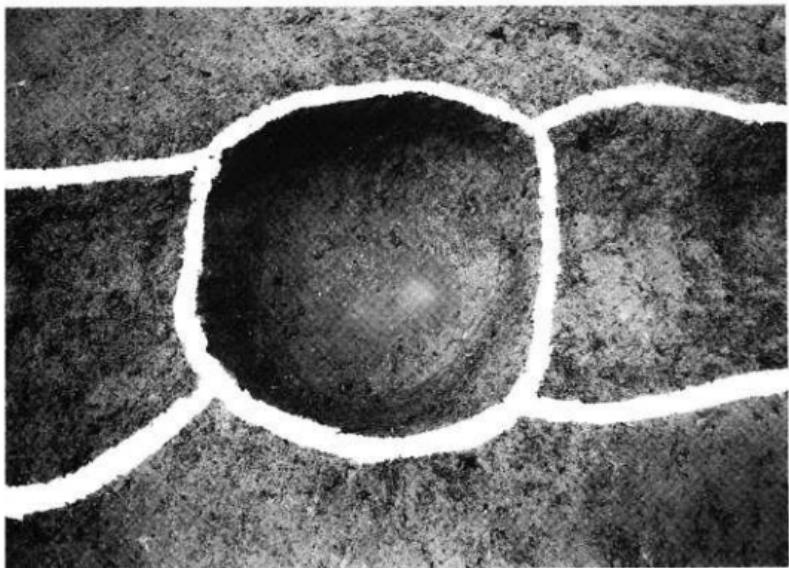
同上 完掘(東から)



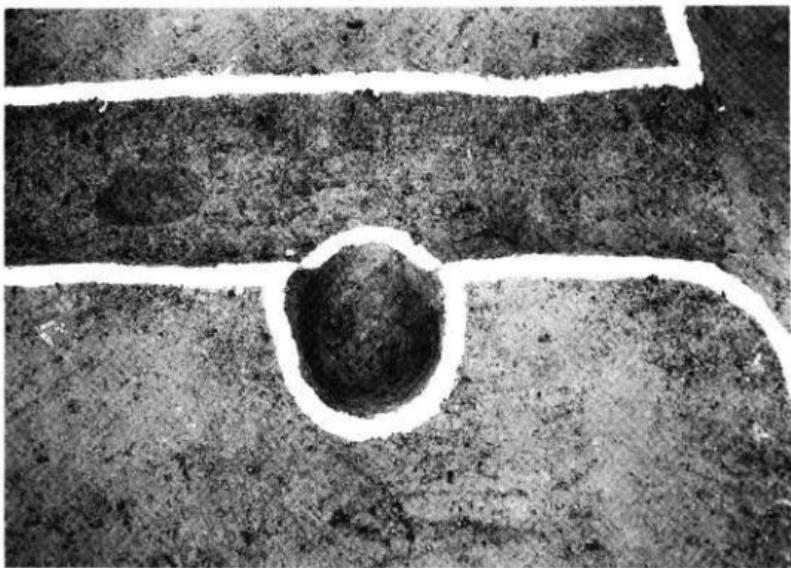
SW-1 (東から)



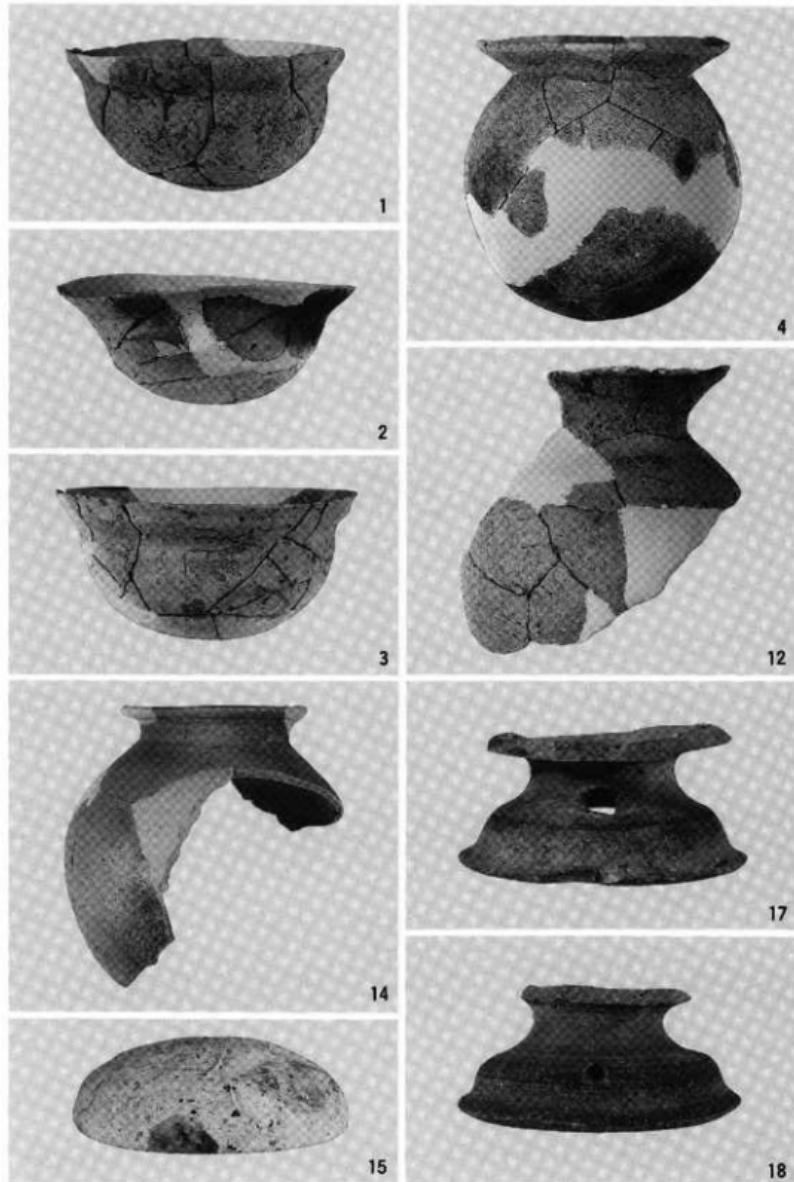
同上 鉄刀(西から)



SP-1 (南から)



SP-2 (西から)



SK-1 (1~4)、SD-1 (12·14·15·17·18) 出土遺物